# 転生者のアーカラじま生活

たくと七星

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

青年、アサヤは交通事故に巻き込まれて命を落としてしまった。しかし目が覚めると豪華なホテルのベッドの上に寝ている事に気付き、自分がアローラ地方に転生している事を知った。カヒリの暮らすハノハノリゾートで手伝いながら暮らしている内にキャプテン二人と友達になり、彼女達からアーカラじまを紹介すると言われて一緒に島を旅する事になった。アーカラじまで暮らす事になったある少年のお話である。

ストーリーはアーカラじまだけを旅して女の子達とイチャイチャする感じに進めて行こうと考えています。

# 目次

第1話「キャプテン二人と友達になる第二の人生」1 ―――― 1
第1話「キャプテン二人と友達になる第二の人生」2 ―――― 11
第2話「ハノハノリゾートで友達に甘える日」1 ―――― 18
第2話「ハノハノリゾートで友達に甘える日」2 ―――― 25
第2話「ハノハノリゾートで友達に甘える日」3 ―――― 31
第3話「ドラゴン使い、ククイ博士の居候」1 ―――― 38
第3話「ドラゴン使い、ククイ博士の居候」2 ―――― 44
第3話「ドラゴン使い、ククイ博士の居候」3 ―――― 53
第4話「優しいお姉ちゃん、ヒガナとポケモンを捕まえる」1 ―――― 59
第4話「優しいお姉ちゃん、ヒガナとポケモンを捕まえる」2 ―――― 68
第5話「しまクイーンライチの憂鬱、メタモン達との4P」1 ―――― 75
第5話「しまクイーンライチの憂鬱、メタモン達との4P」2 ―――― 82
第5話「しまクイーンライチの憂鬱、メタ

モン達との４Ｐ」３ ―――――― 90
第６話「ピカチュウのたに、スイレンの特別衣装」１ ―――――― 96
第６話「ピカチュウのたに、スイレンの特別衣装」２ ―――――― 103
第７話「オハナぼくじょう、お昼の休息」１ ―――――― 110
第７話「オハナぼくじょう、お昼の休息」２ ―――――― 126
第８話「せせらぎのおか、マオ達と遊ぶ」 ―――――― 134
第９話「転生して初めてのバトルロイヤル」１ ―――――― 147
第９話「転生して初めてのバトルロイヤル」２ ―――――― 161
第１０話「ヴェラかざんこうえんの模擬試練」１ ―――――― 168
第１０話「ヴェラかざんこうえんの模擬試練」２ ―――――― 181
第１１話（最終回）「レインボーロケット団出現、新たな冒険の始まり」１ 190
第１１話（最終回）「レインボーロケット団出現、新たな冒険の始まり」２ 203
第１１話（最終回）「レインボーロケット

# 第1話「キャプテン二人と友達になる第二の人生」1

ポケマスをやりながら歩きスマホをしていたのが運の尽きだったのか。青年、アサヤは人生に別れを告げる事になった。ポケマスの高難易度クエストをしながら歩いていたため信号が赤な事に気付かずトラックにぶつかり、それが人生の最後だった。

（俺、馬鹿やっちゃったなあ・・・ゲームに夢中になり過ぎて・・・）

後悔しても遅かった。自分はどうなってしまうのか。暗闇の中でそう思っていたが・・・。

「・・・し・・・もし?」

「う、ううん・・・」

誰かの呼ぶ声が聞こえて来る。目を覚ますとそこには見覚えのある人物がいた。

「気が付きましたね、貴方、ホテルの近くで倒れていたのですよ?」

「え、カヒリ、本物?」

「うん、何を言ってるんですか?」

目の前にいた人物、それはアローラの四天王のカヒリだった。自分は夢を見ているの

かと思って頬を抓るが痛い事に気付き、現実であると知った。
「すみません、カヒリさん。ここは？」
「ここはハノハノリゾート、あたしの父が経営しているホテルです」
　確かに見ると部屋は豪華な作りになっていてベッドの布もいい素材が使われていた。
「カヒリさん、ここってアローラ地方ですか？」
「はい、アローラ地方のアーカラじまです」
　ベッドから下りて外を見ると綺麗な海が広がっていて人とポケモンが活き活きとしている。自分がこの世界に転生している事に気付いた。そして鏡を見ると自分が大人から少年になっている事に気付いた。
「僕、ポケモンの世界に・・・」
「どうしました？」
「カヒリさん、あの、僕はどこで倒れてたんですか？」
「ええ、ホテルの広場で、プールの近くで倒れている所をあたしが見つけたんです」
「あ、あの、ありがとうございます」
「どう致しまして、それで、貴方の家は？」
「家・・・」
　この世界に転生した身の上、住む住居も家も無い。どうしたらいいのか皆目見当もつ

かない。

「あの、僕、親のいない独り身なんです。何でもしますからこのホテルに、ダメですか・・・？」

ダメもとで聞いてみる。

「孤児ですか・・・。ウラウラじまに孤児を引き取る施設がありますが、働く楽しさを早めに知った方がいいかもしれませんね。いいですよ、ここを貴方の家だと思って下さい」

そう言ってカヒリはアサヤにこのホテルに住んでもいいと言った。

「はい、よろしくお願いします」

「ふふ、緊張しなくて大丈夫ですよ。ちょっと手伝いをしてくれれば悪いようにはしませんから」

こうしてアサヤのアローラ地方での生活が始まった。基本的には食器の配布やベルボーイの小遣いをする日々を送っておこづかいを貰う、そんな生活を送った。

「カヒリさん・・・」

手伝いの中でカヒリの事を思っていた。この世界に転生して最初に出会ったトレーナーがカヒリだった。思い入れがあった訳ではなかったがよく見て見れば綺麗な太腿の映える可憐な人に思えて恋心が芽生えていた。

「カヒリさん！」
　カヒリを探してホテルを走っていると彼女の姿が見えた。
「アサヤ、どうしたんですか？」
「あの、僕・・・カヒリさんの・・・」
「ごめんなさい、今日はあたし、トレーニングをしないといけないんです。１０時間はやらないといけないので、貴方はいつも通りに手伝いをしていて下さいね」
　想いを伝えようとしたがカヒリはトレーニングが大事だと言ってホテルを出て行ってしまう。毎日が退屈だと言う訳ではないがカヒリに構ってもらいたい、甘えたいと言う気持ちがあった。この世界に来て自分を救ってくれた存在、もっと知りたいし甘えたいと思っても思いは届かない。それが歯がゆく悔しい気持ちになった。
「カヒリさんは悪くない、あの人は練習して日々精進しているんだ。悪く思っちゃいけないんだ・・・」
　そう言い聞かせながらアサヤはホテルを出て歩いていく。カンタイシティに来てベンチに座り、寂しさから涙を流していた。
「カヒリさん、いつ振り向いてくれるんだろう。僕はあの人が好きなのに、構ってくれない・・・」
「メンメメ？」

そう呟いていると何かが近付いてきた。
「メタモン?」
「メメメン」
下を見るとそこにはメタモンがいた。メタモンはニコリと笑ってビーダルに変身した。
「メビビ、メビダル〜」
頬を抑えて変顔をしたりして少年を慰める。
「ありがとう・・・」
アサヤが撫でると元の姿に戻って少年の膝の上に座った。
「僕と一緒に来てくれるの?」
「メンメメ〜」
友達になってくれるのかと言うとメタモンは頷いた。アサヤはメタモンをボールに入れて手持ちに加えた。初めて捕まえたポケモンがメタモンだったのは意外だったが寂しさを紛らわしてくれるいい存在に思えた。そう思っていると、また、運命の出会いと言える出来事が起きた。
「あれぇ、君、ここじゃ見ない顔だね」
「何だか寂しそう、どうかしたのですか?」

少年が見上げると二人の少女が立っていた。一人は緑のツインテールに花飾りを付けた露出の高い恰好をした褐色肌の少女、自分に優しい笑顔を向けていた。もう一人は青の丸いショートヘアーに白のノースリーブに青のズボンを履いた丸いつぶらな瞳をした少女、二人が少年を見ていた。

「マオ、スイレン・・・？」

前世の記憶で二人がマオとスイレンである事に気付いた。

「そうです、キャプテンのマオです！」

「スイレンといいます。マオと同じくキャプテンをしています」

「ねえ、一緒に座っていい？」

そう言いながらアサヤの隣に座った。スイレンもマオとは反対の方にアサヤの隣に座った。

「元気が無いですね、どうかしたのですか？」

スイレンがアサヤの顔を覗くように聞いて来た。

「何か悩んでるなら聞いて上げるよ」

マオも気さくに笑顔でアサヤに聞いて来る。

「うん、僕、親がいない独り身で・・・」

「親がいないんですか？」

「わあ、それは可哀想・・・」
　親がいないと聞いて二人が悲し気な顔をする。
「今はカヒリさんのリゾートで暮らしてるんだけど、カヒリさん、トレーニングばかりで構ってくれないんだ。それが寂しくて・・・」
「そうなんだ、分かるよ、その気持ち」
　マオがアサヤの手を握って来た。
「あたしも家が食堂やってるんだけど、お父さんもお兄ちゃんも仕事で忙しくて構ってくれないんだよね～」
　父親と兄が相手してくれないから困るとアサヤの気持ちに寄り添う台詞を言った。
「でも、カヒリさんだって、貴方に無関心ではないと思いますよ。私も両親の手伝いで漁に行ってるんです。もちろん、妹達には寂しい思いをさせているんじゃないかって思ってます」
　一方のスイレンはカヒリと同じ立場になって話した。
「でも、見えていない所でも相手の事を思いやっていると思っています。一緒にいるだけが愛情じゃない。見えない場所でも相手を思いやって気にかけている。そんな愛情もあると思いますよ」
「そうかな？」

「そうですよ、カヒリさんも根は悪い人じゃないですし、ね」
「うんうん、ちょっとプライドが高そうだけど、強くてカッコいいしね。アサヤ君もきっと分かるよ、カヒリさんの優しさが」
「そうかな・・・」
「う～ん、まだ実感が湧きそうにないね・・・そうだ、ねえ、スイレン」
　マオがスイレンにひそひそと話して来た。それを聞いてスイレンは頬を赤くしながらも頷いた。
「ねえ、アサヤ君」
「何、マオちゃん」
「ちょっと付いて来てくれるかな？」
　そう言ってアサヤの手を繋いである場所へと連れて行った。

　連れていかれた先は、６番道路の人気の来ない草むら、そこに来ていた。
「あの、マオちゃん、スイレンちゃん」
「アサヤ君はこう言うのって好き？」
　マオが頬を赤くし、両手を背中に組んで聞いて来る。
「好きって？」

「こういう事・・・」
　マオが近付いて少年の唇にキスをした。
「キス・・・」
「そう、女の子のキス・・・元気になったかな?」
「それじゃあ、私も・・・」
　スイレンも恥ずかしがりながらもアサヤにキスをした。
「女の子の優しいキスです・・・」
「うん、唇が柔らかくて、温かい・・・」
「じゃあ、こう言うのもしちゃう?」
「え、きゃ!」
　マオが半ズボンとパンツを脱がした。
「可愛いおちんちんしてるね・・・」
「男の子なのに、丸くて可愛いお尻です・・・」
　マオとスイレンがしゃがんで下半身に頬ずりしていた。マオが性器を握って扱き、スイレンはお尻を甘噛みしている。
「あの、マオちゃん、スイレンちゃん、何するの・・・?」
「怖がらなくていいよ。とっても気持ちいい事をしてあげるだけだから・・・」

「そうですよ、寂しい気持ちなんて吹き飛ぶくらいに優しい事をしてあげますね・・・」
　マオが玉袋を握って撫でて、スイレンが割れ目を指で撫でている。そうして顔を近付けていく。
「じゃあ、スイレン・・・・」
「はい・・・」
「あの、あの・・・・」
「「せーーの！」」
　マオが性器を口に含んでフェラチオをして、スイレンが尻の穴である肛門を舌で舐め始めた。
「うあああ、ああ、あああ！マオちゃんとスイレンちゃんがお尻とおちんちんを舐めてるよ、ああ、こんなの初めて！」
　初めての性行為、それも二人の女の子によるフェラチオとアナル舐めを同時に受けてアサヤは腰をがくがく震わせながら感じていた。
「ぴちゃ、ぴちゃ、アサヤ君の口の中で膨らんでる・・・」
「お尻の穴が舐める度にひくひくしてて、可愛いです・・・」
　マオとスイレンは少年の性器と肛門を愛おし気に見ながら舌で舐めて愛撫していった。

# 第1話「キャプテン二人と友達になる第二の人生」2

マオが亀頭を咥えて舌で舐めていきながら竿を手で擦って扱いていき、スイレンが尻の穴を粘着的に舐めていく。
「スイレンちゃん、ダメえ、お尻の穴汚いから！」
「大丈夫ですよ、貴方のお尻、可愛くていい匂いがしますから・・・」
「そうだよ、スイレンが大丈夫って言ってるから気にしないであたし達のプレイ、感じちゃってね・・・」
マオは可愛く笑って玉袋を撫でたり転がしたりしながらフェラチオを続けていった。掌で転がしたり指で撫でていく。スイレンも尻を触りながら肛門に舌を入れて腸内を舐め回していく。マオが舌を尿道に入れるようにつついていき、スイレンは舌を動かして腸内を舐めていく。
「はあ、あ、あ、あ、ダメ、ダメ、出る、出ちゃう、ああ、ダメえ～～～!!!」
アサヤは限界が来てマオの口内に精液を注いでしまった。
「むう、んんん！」
マオは苦しそうな顔をしながらも精液を口に含んでいく。性器から口を離してスイ

レンの方を向いた。スイレンもアナル舐めを終えてマオの方を向いた。
「マオ、この子の精液、口の中に入ってるんですね・・・良かったら私にも味見させてくれませんか？」
　スイレンが言うとマオは口に含んだまま頷いてスイレンに口移しで精液を飲ませた。
「これが、男の子の精液、病み付きになります・・・」
「うんうん、この滑り、苦味と甘味が合わさって不思議な味わいだね」
　精の味を楽しんでわいわいしている二人に、アサヤは腰が抜けた状態で息を吐いていた。
「ねえ、スイレン・・・」
「ええ、マオ・・・」
　ぐったりしているアサヤを見てマオとスイレンは顔を合わせて頷いた。
「アサヤ君♡」
「アサヤさん♡」
「マオちゃん、スイレンちゃん・・・」
　マオとスイレンが半ズボンを脱いで下半身を裸にした。そしてマオが仰向けになり、スイレンがその上に跨った状態になって互いの秘所を見せて来た。二人の秘所は綺麗な桃色で甘い香りを放っていた。

「アサヤ君、アサヤ君のおちんちんを、あたし達に入れてくれない・・・?」
「私も、貴方のを入れて欲しくて、堪らないのです・・・」
二人共、羞恥心と好奇心で顔を真っ赤にしながらも少年を誘って来る。
「アサヤ君、来てえ、早くう・・・入れて欲しいよお・・・」
「私も、欲しいのですう、どうか、お願い〜〜・・・」
二人が腰を揺らして誘って来る。それを見せられて自制心が無くなりアサヤは近付いてスイレンのお尻を掴んで性器を秘所に当てて、膣内に挿入した。
「ふああ、ああ、貴方の、アサヤさんのおちんちん、私のおまんこに入って来ました!」
「うああ、スイレンちゃんのに・・・おまんこ、温かくて湿り気があって気持ちいい・・・」
前世では経験しなかった初めての性行為に少年は興奮していた。腰を動かしてスイレンの秘所を突いていく。
「はあ、あ、あ、はあん、おちんちんがおまんこの膣内で凄い擦れて、私の膣内、抉れちゃう、あん、あん、あん!」
スイレンは舌を出して息を吐きながら感じていた。
「スイレン、可愛い・・・」
マオはスイレンの感じている顔に愛しさを感じてキスをした。女の子同士のレズキスを見せられてアサヤは腰を更に激しく動かして行く。

「うん、うん、んんん！」
　キスで口が塞がれている為、うめき声を上げて感じていた。
「はあ、はあ、あああ！」
「うんん～～～～!!!」
　限界が来てスイレンの膣内に精液を注いでいった。性器を引き抜くとスイレンの膣内から精液が溢れている。
「はあ、男の子の温かい精液、感じます・・・」
「ああん、アサヤ君、あたしにも頂戴・・・」
　マオが秘所の近くに両手を当てて誘っている。アサヤはマオの秘所に性器を入れて腰を動かしていった。
「ああ～～～、ああ～～～ん!!!男の子のおちんちんが来た～～～！」
「は、はあ、ああ、マオちゃんのおまんこも凄い気持ちいい、おちんちん、締め付けて来て・・・」
　マオの秘所を突いていく。マオは握り拳を作って首を振りながら感じていた。
「ああ、あ、あん、んああ、んにゃああ、男の子の、凄い固くて太くて、ああ～～～、これ大好き！」
「マオちゃん、マオちゃん！」

「えへへ、腰を凄い振ってて、可愛い・・・」
　マオは少年が夢中で腰を振っているのを見て可愛さを感じていた。
「アサヤ君、あたしのおまんこ、気持ちいい？」
「うん、凄く気持ちいい、マオちゃんの、ああ！」
　マオの膣内は温もりがあって自分のを優しく包んでいるのが感じられた。少年は快楽のままに腰を振っていった。
「マオちゃん、好き、好き・・・」
「一杯甘えてる、いいよ、好きなだけ甘えちゃってね・・・」
「マオちゃん、あああ！」
「ああ、出てる、アサヤ君の精液、はああん・・・」
　マオの膣内に精液を注いでいく。この世界に転生して二人の女の子に膣内射精をしてしまった。しかし、マオもスイレンも秘所から精液を溢れさせた状態で満足そうに微笑んでいた。
「男の子にこんなに出して貰えて、幸せ・・・」
「アサヤさん、満足しましたか？」
「うん、とても・・・」
「それは良かったです・・・」

「あたしもスイレンも良かったよ・・・」
　スイレンとマオは少年に優しく微笑んでいた。

　その後、マオとスイレンと一緒にカンタイシティに戻ってベンチに座ってアイスを食べていた。
「アサヤ君、アサヤ君に友達はいる?」
　マオが友達はいないかと聞いて来た。
「え、いないけど・・・」
　まだ転生したばかりで友達なんている訳もなくアサヤは素直にいない事を伝えた。
「そうなんだ。じゃあ、あたし達が友達になってあげる!」
　マオが笑顔で友達になると言った。
「私もなってあげます」
　スイレンもマオと同じく友達になると言った。
「あたし達が友達になれば寂しくないでしょ?それに、貴方には色々と教えてあげたいし、友達になってあげるよ」
「ありがとう」
「えへへ、アサヤ君、これからよろしくね」

「私もよろしくお願いします」

マオとスイレンがアサヤに握手をして微笑んだ。この世界に転生して初めて出会った女性には思いを伝えられなかったが、代わりに遊んでくれる優しい友達に巡り合えた。それを思うとこの島での生活が楽しみに思えて仕方がない。アサヤの顔も笑顔になっていた。

# 第２話「ハノハノリゾートで友達に甘える日」１

　不慮の事故で命を落とした青年、目が覚めるとアローラ地方に転生していた。自分の居場所を与えてくれた人に想いを寄せるも彼女は練習に夢中で振り向いてはくれない。寂しい思いをしていた時、ここで、この世界で初めての友達が二人出来た。それからは退屈しない充実した毎日が始まった。

〈ハノハノリゾート〉
「アローラ!アサヤはいますか!」
　リゾートに二人の少女がやって来た。マオとスイレンである。
「あら、貴女達・・・?」
　これから練習に行こうとしていたカヒリは彼女達に気付いて声を掛けた。
「おはようございます、キャプテン達」
「カヒリさん、アサヤはいる?」
　マオがカヒリに友達の少年はいないかと聞いた。
「アサヤですか?」

「はい、今日も彼と遊びに来ました」
　スイレンが遊びに来たことをカヒリに伝えた。
「そうですか、いつも彼と遊んでくれて感謝しています」
「はい、だって彼とは友達ですから」
　マオが笑顔で友達であると言った。
「アサヤ、友達が遊びに来ましたよ」
　カヒリが手伝いをしているアサヤを呼んだ。
「カヒリさん・・・」
「キャプテン二人がいます」
「マオ、スイレン！」
　自分に笑顔で手を振る少女に気付いて少年は嬉しそうに駆け寄った。
「アローラ、アサヤ遊びに来たよ！」
「今日も来てくれたんだ！」
　アサヤとマオは手を繋いで喜んだ。少年も自分の事を木にかけてくれてこうして遊びに誘ってくれる二人に懐くようになっていた。
「それじゃあ、今日も沢山遊びましょうね」
「うん！」

スイレンに言われて子供達がリゾートの外を出て遊びに出かけた。
「カヒリさん、行って来るね！」
「夕方までには帰って来るのですよ！」
少年少女達を見送ってカヒリは息を吐いて背伸びをした。
「お嬢様、アサヤ君も最近明るくなって来ましたね」
リゾートで働くベルボーイがカヒリにアサヤがここ最近、明るくなった事を言った。
「そうですね、最初はどこか暗くて塞ぎ込んでいた感じでしたが、友達が出来て元気になったのでしょう」
「そうだと、いいんですけどね・・・」
「え、どうかしましたか？」
「いえ、何でもございません・・・」
ベルボーイは内心思っていた。アサヤがカヒリに好意を寄せているのではないかと。しかし当の本人は気付こうとしない。それで苦悩していたのではないかと。しかも彼女はまだその事に気付く様子を見せない。それを伝えようにも伝えられなかった。アサヤとカヒリのこれからがどうなるか、心配な気持ちになるベルボーイだった。

リゾートの海に来てアサヤは背伸びをする。パンツ型の海パンを着ている露出のあ

る恰好をして陽の光を浴びていた。今日はマオとスイレンと一緒に海で遊ぶ日なのだ。
「お待たせ！」
「来ました！」
マオとスイレンの声が聞こえた。アサヤが振り向くと水着姿のマオとスイレンが自分に笑顔で手を振っていた。
（マオとスイレン、結構エッチな水着をしてるな・・・）
アサヤは内心そう呟いた。二人共かなり刺激的な恰好をしていたからだ。マオは布地の少ない、乳首と秘所を隠した黒のマイクロビキニでスイレンは白のスク水を着ていた。
魅力的な水着姿をしているキャプテンの美少女二人が少年に優しく手を振って歩いて来た。
「二人共、可愛いね」
「そうでしょう、アサヤが喜ぶんじゃないかと思って・・・」
マオは両手を上げて腋を見せるポーズを取った。
「私は、ちょっと恥ずかしいですね・・・」
スイレンは太腿をもじもじさせて頬を赤くさせて恥ずかしがっていた。
「アサヤ・・・」

「アサヤ、楽しみましょう」
　マオとスイレンがアサヤの肩に抱き着いて遊びに誘った。女の子二人に肩を抱かれて少年はドキドキしていた。かなりエッチな水着を着ている美少女二人が自分に好意的で優しく接してくれている事に凄く嬉しく感じてしまう。
　それからマオとスイレンと一緒に海で遊んだ。
「あ、ナマコブシがいるよ！」
「いますね！」
　ナマコブシがいる。アサヤにとっても初めて見るポケモンだった。マオとスイレンが手に取った。
「それ！」
「えい！」
　取るや否や海へを投げてしまった。
「え、いいの、投げちゃって・・・」
「いいのいいの、ナマコブシを見つけたら投げて海に返すようにって決まりがあるから」
「海の景観も綺麗になるし、お小遣いも貰えていい事尽くしです」
　笑顔で言う二人にアサヤは価値観が違うと考えも違うのかと思った。アローラではこれが当たり前なのだと受け入れる事にした。

「ほら、アサヤも投げてみて!」
マオがナマコブシを持ってアサヤに渡した。
「大丈夫です、元の海に返してあげるだけですから」
「わ、分かった・・・」
二人に勧められてナマコブシを海に投げた。水音が響いてナマコブシは海へと帰っていく。そうしてマオ達と海で水を掛け合ったり泳いだりして楽しんでいった。

そうして楽しい時間を過ごして昼過ぎになった。
「ふう、結構楽しめたね」
外れの砂浜でマオとスイレンと一緒にシートの下に座って休憩していた。
「どう、アサヤ、楽しめた?」
マオが楽しかったかをアサヤに聞いた。
「うん、楽しめたよ」
「良かった、アサヤはあんまりアローラの事を知らない感じだったから色々と教えてあげたいと思ってたし」
「色々教えてくれるの?」
「うん、あたしとスイレンで貴方に色々教えてあげたいと思うの」

「だからアサヤ、私達に色々と聞いて、アローラの事を好きになって下さいね」
「分かった」
「うん、素直でいいよ。あれ？」
　マオがアサヤの海パンを見た。
「あれれ、アサヤ、ここが膨らんでない？」
「あ、こ、これは・・・」
「分かります、私とマオをエッチで見てたんですよね？」
　そう言うとスイレンとマオがアサヤの肩に抱き着いて来た。マオは自分の胸を肩に挟ませてきて、スイレンは耳に息を吹きかけて来る。あっと言う間に股間が膨らんでしまった。
「うふふ、おちんちん固くなっちゃったね」
「私達がいけないんですよね？」
「そ、それは・・・」
「いいんだよ、男の子なら当たり前の事だもんね。だから・・・」
「今日も、甘えさせて差し上げます」
　耳元に息を吹きかけるように語り掛けて来る。その後どうなるかは予想出来た。

# 第2話「ハノハノリゾートで友達に甘える日」2

「ちゅ、ちゅ、ちゅう・・・」
「ふふ、いいよ、一杯吸って甘えてね♡」
アサヤがマオの膝に仰向けに座って胸の乳首を吸っていた。無我夢中でマオの乳首に吸い付いて、母乳を吸うように吸っていった。
「マオのおっぱい凄い吸ってますね。私がおちんちんをしこしこしてあげます・・・」
スイレンはアサヤの勃起した男性器を手で握って扱いて来た。握った手を上下に動かし、指の腹で裏筋を撫でたり柄の部分を握ったり離したりしながら手を動かして扱いていく。亀頭を握り掌で転がしたり摘まんだりしていく。
「うん、うん、うん、うんん!!!」
スイレンに手コキをされてアサヤは感じている声を上げていた。
「アサヤ、スイレンのしこしこに凄い感じてるね。いい子いい子・・・」
マオが胸を吸っているアサヤの頭を優しく撫でた。
「もっとして差し上げます。しこしこ、しこしこ・・・」
裏筋を爪を立てて線を書くようになぞったり尿道を指の腹で撫でたりしていきなが

ら玉袋を握って行く。
「あ、あ、あ、あ、ダメ、ダメ、ああ、ダメえ、あああ!!!」
　アサヤは堪え切れなくなって射精してしまった。
「わあ、凄い出てる!」
「アサヤ、気持ちよさそうですね・・・」
　勢いよく飛び出る精液を見てマオとスイレンは驚いていた。
「はあ、ああ、はあ・・・」
　ぐったりとしているアサヤにマオとスイレンは乳首を舐めながら性器を扱いて来た。マオが乳首を舌で転がして、スイレンは直に吸い付いて乳首を攻めている。そうしながら性器を二人の手が握ったり撫でたりしていく。
「あああ、あん、あん、あん!ああ～～～ダメえ!」
　アサヤが再び射精してしまった。
「アサヤの精液、沢山出たね・・・」
「凄い量です」
　手にかかった精液を二人は舌で舐め取った。
「うん、中々にいい味だね・・・」
「そうですね・・・」

マオとスイレンは腕を上げて腋をアサヤに見せて来た。
「アサヤ、あたし達の腋、舐めてみる?」
「恥ずかしいですけど、貴方になら・・・」
「マオとスイレンの腋の匂い・・・」
二人の汗の染みた腋の匂いがアサヤの鼻に漂っていた。少年は欲望にかられて二人に近付き、腋を舐めて来た。
「うふ、アサヤったら腋を凄い舐めて、いいよ。一杯嗅いで、舐めちゃって・・・」
「アサヤ、貴方の好きなように舐めて下さい」
マオの腋に甘噛みしたり、スイレンの腋にはキスして舌で汗を舐め取るように舐めていった。
「アサヤ」
マオがアサヤに抱き着いて来た。マオの体のいい匂いと柔らかな胸の感触が伝わって来る。マオを押し倒して仰向けにして、マオの胸に埋めるように顔を動かしながら勃起している性器をマオの秘所にビキニ越しに擦るように動かした。
「あは、アサヤ、凄い腰振ってるね」
「マオ、マオ、入れたい、マオのおまんこにおちんちん入れたい・・・!」
「慌てないの、あたしは消えたりしないよ」

アサヤの体を優しく抱き締めてあやすように背中を摩っていく。アサヤはマオの胸に甘噛みして体の匂いを聞ぎながら体をくっ付け合っていた。
「おいでアサヤ、入れてもいいよ」
「マオ！」
マオも膣内に性器を差し込み、飲み込ませていった。
「ああん！あああ、入って来たよ、アサヤのおちんちん！」
「マオ、マオのおまんこ、温かい・・・！」
「いいよ、アサヤ、動いちゃって。あたしと一緒に気持ちよくなろう？」
マオが頬に手を添えて誘って来る。アサヤは腰を動かしてマオの膣内を突いていった。マオの膣内は柔らかい感じになっていて動かす度に膣内が広がっていき、滑らかに動けるようになっていく。
「アサヤ、アサヤのおちんちんが、あたしのおまんこの膣内を凄く広げてるの！」
「マオの凄い広くて温かくて気持ちいい！」
マオの胸を吸いながら腰を激しく突き動かして感じさせていく。
「アサヤ、おっぱい吸って、おまんこ凄い突いて、いいよ、もっと感じちゃって・・・」
「マオ、マオ、マオ、ああ、マオ！」
「ああ、あああ・・・おまんこの膣内に、精液感じるの・・・」

マオの膣内に精液を流し込んでいく。マオはアサヤにしがみ付いて感じていた。
「はあ、アサヤ、気持ちいい？」
「うん、マオのおまんこ、気持ちいい。それにいい匂いもして・・・マオ！」
マオの体を強く抱いて腰を振って精液や愛液の混ざった性器をマオの腹に擦り付けていく。そうしながらマオとキスをして舌を絡め合うディープキスをした。
「マオ、マオ・・・」
「アサヤ、可愛い・・・」
アサヤとマオがイチャイチャしているのをスイレンは見ていた。アサヤがマオとエッチしている間、スイレンはずっと二人の行為を見ていた。
「むう・・・」
焼きもちを妬いたのか、アサヤの手を強引に引っ張って自分に引き寄せた。
「あん、スイレン？」
マオが驚いていたがスイレンは気にせず自分をアサヤに寄せて、自分が仰向けになり、アサヤを上にさせた。
「スイレン？」
「もう、マオばかりに甘えていないで私にも構って下さいよ・・・」
頬を赤くし膨らませた顔でアサヤに言った。

「ごめんねスイレン。スイレンともエッチするから・・・」
「私も貴方を気に入っています。ですから、マオと同じように可愛がって下さい」
スイレンは優しく微笑んでアサヤにキスをした。スイレンのスク水をずらして秘所に性器を入れて腰を動かしていった。

# 第2話「ハノハノリゾートで友達に甘える日」3

「ふあああ、アサヤのが凄い動いてます～～～！」
スイレンは両腕をくねらせるように動かしてアサヤの突きを感じていた。スイレンと体をくっ付けて汗の匂い、スク水の質感を感じながら腰を動かしていく。両手を握り、舌を絡め合うディープキスをして互いの胸板を擦っていった。
「アサヤ、愛しています。貴方にならエッチされてもいい、だから私の事も構ってえ・・・」
「スイレン、可愛い・・・」
潤んだ目で愛の言葉を言うスイレンに愛しさが増して腰を更に動かして行く。
「うあ、ああ、お、お尻に何か！」
すると尻の穴に滑りのある感触が感じられた。
「れろ、れろ、二人だけいい感じになってずるい、あたしも混ぜて♡」
マオが後ろからアサヤの尻の穴を舌で舐めていた。最初は舌先で穴をつつき、穴をアイスを舐めるように舌を動かしていき、そして直に口を付けて舐めていった。
「アサヤ、アサヤのお尻の穴をこうして舐めて気持ちよくしてあげる・・・」
「うあああ、ああ、ああ、マオが凄い舐めて来るよ！お尻を凄い舐められて、うう、くう

！」

体中に電気が走っている。アサヤは快感に堪えるように必死になって腰をさっきよりも激しく動かした。

「ふにゃあ、んああ、アサヤが凄い激しく動いてる。ああん、マオ、折角私とアサヤでいい気持ちになっていたのに～～～・・・！」

「ごめんスイレン、けど、お預けは嫌でしょ。だからこうして舐めてあげるの」

マオはお尻を掴んで尻の穴を舐め続けていく。

「ああ、もうダメ、出る、出る、ああ、ダメえ～～～!!!」

アナル舐めの快感にアサヤは絶頂を迎えてスイレンの膣内に射精した。

「ああ！あ、ああ、あん、アサヤのが凄い出てます・・・！」

スイレンは体を何度も跳ねて絶頂した。アサヤが性器を抜くと、ぐったりと倒れ込んだ。

「はあ、はあ、アサヤの凄い出てます・・・」

スイレンは満足そうに息を吐いていた。

「アサヤ、あたしにお尻を舐められるの、どうだった？」

マオが笑顔でぐったりしているアサヤにアナル舐めされた感想を聞いた。

「う、うん、凄く気持ち良かったよお・・・はあ、はあ・・・」

「気持ちよく感じてくれたみたいだね、凄く嬉しいよ。あら？」
　すると何かの気配に気付いた。
「マ、マオ・・・！」
　スイレンは目を大きく見開いて驚いていた。
「きゃ、あ、あたし?!」
　マオも驚いていた。そこにいたのは、もう一人のマオだった。目をキョトンとさせてマオとアサヤを見ていた。
「マオがもう一人、どうなってるの・・・？」
　スイレンはあたふたして驚いている。
「ええ、あたしがもう一人いる。これって凄くない？」
　マオは凄く興味津々にもう一人の自分を見ていた。
「もしかして、メタモン？」
　アサヤはメタモンかもしれないと思って荷物を見た。見るとそこには開けられたボールがあった。
「僕の、メタモンなの？」
「メンメロメ～～！」
　アサヤが聞くともう一人のマオがニコリと笑った。どうやら自分の捕まえたメタモ

ンのようだ。
「アサヤのメタモンなんだ、いやあ、あたしに変身するなんて凄いなあ・・・！」
マオは自分の姿になっているメタモンをつぶさに観察していた。
「ふんふん、匂いはメタモンのままだね・・・」
鼻でメタモンの匂いを嗅いで首筋を舌で舐めた。
「モン・・・！」
メタモンはくすぐったそうにしている。そして胸を揉んで捏ねてみた。
「肌の質感は人間そっくり・・・本当に人間みたいだね。そうだ・・・！」
何かを思い付いたのか、マオはメタモンの手を握って引き寄せた。マオが仰向け、メタモンが上に乗る体勢で秘所をアサヤに見せていた。
「ねえ、アサヤ、どっちが気持ちいいか試してみる？」
「それって、でも・・・」
マオとは大丈夫だがもう一人はポケモンである。ポケモンとエッチするのはどうかと思っていた。
「大丈夫、人間になってるから問題ないと思うの。どっちが気持ちいいか、やってみて、ね♡」
マオに言われてアサヤはする事にした。まず、マオに変身しているメタモンの秘所に

性器を入れた。
「モモ、モン～～～～!!」
入れられた感覚にメタモンは声を上げて感じていた。アサヤは腰を動かしてメタモンを突いていく。
「うわあ、メタモンのおまんこ、凄いぬるぬるしてて、気持ちいい・・・!」
メタモンの膣内は人間と同じ作りになっていて滑りのある感触が心地よく感じられた。
「メメ、モン、モン、モン～～～!」
少年に後ろから突かれる感触にメタモンは喘ぎ声を上げて感じていた。頬を赤くして舌を伸ばしていた。
「あたしの顔もこうなってるのかな、何だか可愛い・・・」
マオは自分になっているメタモンにキスをしていく。アサヤはメタモンに射精してマオに入れた。
「きゃ、あああ、アサヤのおちんちんが来た。ああ、これ気持ちいい・・・!」
「マオのおまんこも温かくて優しく包んでくれてるみたいで気持ちいい・・・!」
「ああ～～、ああ～～～ん、おまんこ激しく突かれてるの、アサヤのいい、アサヤ、ああ～～～、アサヤ!」

マオは握り拳を作ってアサヤの攻めを感じていた。そしてマオの膣内に射精した。
「ああ、出てる、アサヤの精液、はあ、あああ・・・」
マオはぐったりと倒れている。マオの姿になっているメタモンは体をドロドロに溶かしていく。体が崩れて元の体色、姿に戻ってマオのお腹に乗ってぐったりとしていた。
「メタモンが人間になるなんて・・・」
スイレンは思い出していた。メタモンは人間になってその生活に紛れていると。それを現実に見て心臓がドキドキしていた。

「はい、アサヤ、Z定食だよ、召し上がれ」
エッチの後、マオが持って来た定食をアサヤに差し出した。
「はい、あ～～～ん」
料理の一つをアサヤに食べさせた。
「私も、どうぞ♡」
スイレンも自分の定食の料理をアサヤに食べさせた。
「ねえ、アサヤ。アサヤはリゾートでお手伝いしてるんだよね」
「うん」

マオがアサヤの目を覗くように言った。
「でも、お手伝いばかりの毎日って退屈だと思うの。アサヤが望むなら、あたしがアーカラじまの全てを見せてあげようか？」
それを聞いてアサヤはアーカラじまを旅が出来るのではと思った。
「私も色々と教えますので、行きましょう？」
スイレンが手を握って行こうと誘って来た。
「うん、僕、マオ達と一緒に行きたい」
「じゃあ、決まりだね。明日、あたし達の住むコニコシティに連れてってあげる。それからは色々と見て回ろう」
「アサヤ、楽しみにしてて下さいね」
「うん、ありがとう」
マオとスイレンに案内させてあげると言われてアサヤは嬉しい気持ちになった。明日、どんな冒険が出来るのか、楽しみになっていた。

# 第３話「ドラゴン使い、ククイ博士の居候」１

「アローラ、アサヤいる？」
　約束の日、マオ達はやって来た。マオが元気よく挨拶してアサヤを呼んだ。
「マオ、スイレン！」
　マオとスイレンが笑顔で手を振っているのを見てアサヤは駆け寄った。
「今日も遊びに来たのですか？」
　カヒリが遊びに来たかとマオ達に聞いた。
「ううん、今日はアサヤにアーカラじまを紹介しに来たんです！」
「この島を？」
「はい、アサヤにアーカラじまの良さを知ってもらう旅、名付けてアーカラじま一周旅行に出ようと思うんです！」
　マオが両手を広げてアサヤに島の全てを紹介すると言った。
「そうですか、この子もまだ島の全てを知っている訳ではありませんし、いい経験になるかもしれませんね」
「アサヤ、一緒に行こう！」

「行きましょう」
　マオとスイレンがアサヤを誘う。アサヤはもちろん頷いた。
「うん、行ってみたい！」
「よし、それじゃあ出発しよう、おいで！」
　マオが手を差し伸べて来る。アサヤはマオの手を繋いでハノハノリゾートを出た。
「行って来ます！」
「はい、いってらっしゃい」
　カヒリは笑顔で手を振ってアサヤを見送った。
「あの子が島を旅するなんて、いずれ島めぐりをするのかしら？」
　カヒリはそう考えていた。子供の旅と言えば島めぐりである。いつかは・・・そう考えていた。
　リゾートからカンタイシティを通ってディグダトンネルを入った。
「アサヤ、このトンネルを抜ければあたし達が暮らすコニコシティに行けるの」
「コニコシティ？」
「そう、あたしのレストランやライチさんのジュエリーショップとかいろいろなお店のある楽しい街なの！」
「アサヤも行けばきっと好きになれますよ」

スイレンは自分の住んでる街をアサヤがどう反応するのか楽しみにしていた。
「で、このディグダトンネルだけどね・・・」
マオがトンネルに付いて話そうとしたその時、
ドガーーーン!!!
「わわ、今の揺れ、何?!」
マオは口をあんぐり開けて驚いていてスイレンはマオの肩に手を付いて体を支えていた。
「アサヤ、大丈夫?」
アサヤが心配になって少年に声を掛けた。
「怪我はありませんか?」
スイレンもアサヤに怪我はないか体中を触って来た。
「うん、大丈夫だよ」
「良かった・・・凄い揺れだったね」
「はい、ディグダ達がこのトンネルで暴れていたのは知っていますが、こんなに激しいのは初めてです」
「そうだ、アサヤ、このディグダトンネルはディグダ達が暮らしているの。でね、時に地面を凄く揺らしたり暴れたりする時があるんだよ」

マオがディグダトンネルについてをアサヤに説明した。アサヤもディグダトンネルでディグダが暴れていると言うのは前世の記憶で覚えていたがこれほど激しい揺れだったとは思わなかった。

「いやあ、凄い揺れだったぜ！」

そこへ褐色肌の筋肉質な白衣を着た男性が駆け足で現れた。

「ククイ博士？」

マオが博士が現れた事に驚いていた。アサヤは前世の記憶で彼がククイ博士であるとすぐに気付いた。

「よう、マオ、スイレン。ディグダ達が凄い暴れているようだね」

「うん、凄い揺れだったよ」

「ああ、まるでじわれのような揺れだったぜ。所で、そこにいる少年は？」

博士がアサヤに気付いて声を掛けた。

「この子はアサヤ、あたし達でアーカラじまを紹介してるんです」

「あ、アサヤです」

「アサヤか、僕はククイ。ポケモンの技を研究しているんだ。マオ達といるって事は君も島めぐりをしているのかい？」

「いえ、マオ達にアーカラじまを紹介してもらっているんです」

「そうか、この島を好きになるのもいいかもな。でも、島めぐりをしてみるのもいいぜ。そうすれば君の人生は広がるはずさ。さてと、彼女はどうしたかな？」
「彼女、何ですか？」
　マオが気になって博士に聞いた。
「ああ、僕の研究所で一緒に暮らしている子がいてね。今は別行動を取ってるんだ。どこに行ってるのか心配になってね」
「じゃあ、あたし達も探しに行っていいですか。アサヤにトンネルを紹介したいと思ってましたし」
「ああ、そうしてもらえると助かるよ」
　ククイ博士の頼みを聞いてマオ達はトンネル内を歩いていった。ククイ博士と一緒に暮らしているのが誰なのかそれも気になっていた。
「ククイ博士の研究所でリーリエがお世話になってたよね」
「はい、前はそうでしたね」
　マオとスイレンが博士の相方に付いて賑やかに喋っていた。アサヤも相手が誰なのか気になっていた。ククイ博士の絡みからもしかするとあの人物かもしれないと思っていた。すると、凄まじい地響きと共に何かが吠えている声が聞こえて来た。
「わあ、何だろ今の？」

「ディグダの声とは思えませんね・・・」
　二人はディグダの声とは違うと思った。そのまま進んでいくとそこには緑の竜のポケモンが眼鏡を付けた悪党達を前に吠えていた。
「うわあ、凄いポケモンがいるね」
「あれは、レックウザ?」
　スイレンはそのポケモンがレックウザであると見抜いた。見るとレックウザの持ち主と思われる相手が悪党達を睨んでいる。
「あれは・・・」
　ショートヘアーにボロのマント、足にはとぐろを巻いた飾りを巻いている女性、アサヤは誰なのかすぐに分かった。

# 第３話「ドラゴン使い、ククイ博士の居候」２

「あっははは、これだけの数がいれば伝説のポケモンもひとたまりもないだろ！」
リーダー格の男は数では有利である事に勝ち誇っていた。
「君達がディグダ達を騒がせていたんだね」
女性がブレイク団達を睨んでトンネルで騒ぎを起こしているのかと聞いた。
「はっはあ、トンネルのディグダを片っ端から捕まえてやろうと思ったが、伝説のポケモンを連れたトレーナーが現れたのは丁度いいぜ！」
「待った、これ以上の悪さはさせないよ！」
マオ達が女性の方に来てブレイク団に立ち向かおうとした。
「おお、君達、あたしの手伝いをしてくれるの。丁度いい所に来てくれたね！」
女性がアサヤ達の方を向いて加勢に来てくれたのかと思って喜んだ。
「へ、いくら助けが来ようとも数の上ではこちらが有利だ！」
ブレイク団達がレックウザを捕まえようとするとレックウザは咆哮を上げた。その威圧感にブレイク団は捕まえようにも捕まえられずにいた。
「お、おい、何ビビってるんだ！何とかして捕まえるんだ！」

「想像力が足りないよ」
レックウザをしぶとく捕まえようとするブレイク団達に女性は瞳の光を消して睨んで来た。
「君達、運がいいね」
手を合わせて笑顔を作ると獣のような好戦的な顔をして言った。
「本当なら足腰立たなくなるくらい痛め付けてやろうと思ってたけど・・・この子達の前では刺激が強すぎるからね」
アサヤ達の方を向いて言う。まだ幼さのある幼気な子供達に残酷に見えるような振る舞いを見せるのは可哀想だと思ったのだ。
「命拾いしたね、この子達に感謝しなよ」
「ひ、ひええ～～～!!!」
ブレイク団達は一目散に逃げて行った。
「やれやれ、あっけないね。あんな奴等でも自分の信念があったのかな。裏切られてあなるのは分かるけど・・・まあ、あたしには関係ないね。さて、君達、これで事件は無事解決したから安心していいよ」
「では、ディグダ達が暴れる事は無いのですか?」
スイレンの言葉に女性は笑顔で頷いた。

「もちろん、悪い奴等は逃げて行ったし、ディグダ達もこれで落ち着くと思うよ」
「良かった、それにしても貴女凄いね！」
「え、あたしが？」
　マオとスイレンは興奮して女性を見ていた。興味があるのはやはり伝説のポケモンである。
「だってあんな悪い人達を人睨みで退散させるんだもん」
「それに連れている伝説のポケモンもカッコいいですね」
「ああ、はは、そんな有名人みたいね目で見られると困っちゃうなあ・・・。まあ、嫌いじゃないけどね」
　憧れの目で見られて女性は困惑してしまったが、羨望の目で見られている事に愉悦を感じていた。
「ククイ博士の言ってた人って貴女？」
　マオがククイ博士と同行していた相手は貴女かと女性に聞いた。
「ああ、そうだね。あたしはヒガナ。ご覧の通りのさすらいのトレーナーです。ま、今は訳あってククイって人の下で居候になっているんだけどね」
「居候、じゃあ博士のお手伝いと化してるの？」
「まあ、技の研究の手伝いや島のパトロールはしているかな？」

そう言っているとヒガナはアサヤの方に目を向けた。
「やあ、初めまして。あたしはヒガナ、君の名前は？」
「僕、アサヤって言います」
「そうか、アサヤか。可愛いね君、シガナみたいだよ」
親し気に笑顔で振る舞い、頬をつついたりしていく。
「おーい、ブレイク団が逃げて行ったけど、何かあったかい？」
そこへククイ博士が駆け足でやって来た。
「ああ、博士、悪い奴等は皆逃げて行ったよ」
「そうか、トンネルでの騒ぎは無事解決だね。おまわりさんに伝えよう。マオ達はこれからどうするんだい？」
ククイ博士がマオにこれからどうすると聞いた。
「うん、アサヤにコニコシティを紹介しようと思って、このトンネルの先を進もうと思うの」
「そうか、アサヤ、コニコシティはいいぜ。人もポケモンも活き活きしててアーカラじまでとても賑わいのある街だ。君もきっと好きになるぜ」
ククイ博士が笑顔でサムズアップして後押しした。
「博士、あたしもこの子に付いて行っていいかな？」

ヒガナが博士に自分も同行していいかと聞いた。
「さっきの悪い奴等の事を考えるとこの子達だけじゃ心配だし、頼りがいのある人がボディガードしてあげるのもいいと思うの」
「そうか、これといって事件は無いし、自由にしてくれて構わないぜ。ヒガナ、マオ達の事、よろしくな」
博士は手を振ってヒガナ達と別れた。
「ありがとう、ヒガナさん」
マオがヒガナに礼を言った。
「お礼されるほどでもないよ。さあ、あたしが守ってあげるから安心して行くといいよ」
ヒガナが守ってくれる事に安心してアサヤ達はトンネルを進んでいった。トンネルを出て、交番のある道路を進んでいき、コニコシティに到着した。
「さあ付いたよアサヤ、コニコシティに！」
マオが両手を広げてコニコシティを紹介した。
「ここが・・・」
アサヤも人尾の声がこだまするほどの賑わいに驚いていた。前世の記憶では賑やかそうに感じていたが、人々の声が聞こえてくるとこれほどの賑わいぶりなのかと驚いていた。

「コニコシティは凄いよ。あたしの食堂に、ライチさんのジュエリーショップ、マッサージ屋に漢方屋さんに色々とお店があるの」
「アサヤ、まずはどの店に行きますか」
　マオとスイレンがアサヤにどの店に行くかを聞いた。そんな時だった。
「お～い、マオ、丁度いい所に来たな。店の手伝いをしてくれよ！」
　食堂でマオの兄が手を振ってマオに店の仕事をしてくれと言って来た。
「あ、兄ちゃん。ごめんねアサヤ、折角いい所を紹介しようと思ったけど、店のお手伝いをしないといけなくなっちゃった」
「それは、仕方ないよね」
「マオ、手伝いに行ってあげて下さい。私が見てあげますから」
　スイレンがアサヤに色々見せてあげると言ったが。
「スイレンお姉ちゃん！」
　スイレンの二人の妹達がやって来た。
「どうしました？」
「お父さんが探してたよ。漁に出かけるから一緒に来いって」
「そうですか、残念ですね。ごめんなさい、アサヤ。戻るまで待っててくれますか」
「ごめんね、色々見せてあげたかったけど・・・」

　スイレンとマオが申し訳なさそうに謝るとヒガナが胸を叩いて微笑んだ。
「大丈夫だよ、あたしがこの子を見てあげるから、安心して手伝いに行きな」
「ヒガナさん、お願いね」
「それじゃあ、アサヤ、待ってて下さいね」
「うん」
　二人は手伝いをするために戻って行った。
「行っちゃった・・・」
「まあ、仕方ないよ。けど、あたしにとってはラッキーかな？」
「ラッキー？」
「君とこうして二人きりになれたのがね・・・」
　そう言うヒガナは女性のような表情をしていた。
「そうだ、この街、岬があるんだった。そこでお話でもしない？」
「うん、いいね」
「じゃあ、行きましょうか」
　ヒガナの誘いに乗って岬に言った。
「ふう、いいね。潮風が涼しくて。ホウエンの海もいいけど、この地方の海もまた格別だねえ・・・」

潮風を感じながらヒガナはホウエンでの出来事を思い出していた。
「アサヤ、あたしさ、自分が何者なのか、自分の使命は何かを考えていたんだよね。そして自分が正しいと思った正義のために頑張ったけど、それをかなえたのは違う相手だった・・・」
エピソードデルタでの話だろうなとアサヤはそう思っていた。言うとややこしくなるかもしれないと思い、黙ってヒガナの話を聞いていた。
「けど、今は色々あってレックウザを仲間に出来たし、その時に出会った博士の下でこのアローラで自分に出来る事を探しているんだけどね」
「そうなんだね・・・」
「アサヤ、君にはあるかな。自分の生きる道とか、使命とか。なんて、君にはまだ難しいよね」
そう言ってアサヤの頭を撫でると両手を頬に添えて見つめて来た。緊張しているアサヤにヒガナは艶やかに微笑んでいた。そしてアサヤにキスをした。
「ヒガナさん?」
「お姉さんのキスって奴だよ。君さ、何か只者じゃないと思ってたんだよね。君は何かし使命の為に生まれ変わって来たんじゃないかな、と思うんだよね。だからかな、君の事に興味が湧いてるんだよね。ねえ、もっと気持ちいい遊び、教えてあげようか?」

そう言うとズボンを脱がして性器を晒した。
「ふふ、男の子だけど、可愛いおちんちんしてるね。これを舐めてしゃぶってあげる・・・♡」
亀頭にキスをして口に含んで舐め始めた。
「うああ、あのヒガナさんが・・・」
少年はヒガナがエッチにフェラチオをしているのに驚いていた。ヒガナは目を閉じて少年の性器を咥えて舐めていた。口の中で舌を絡ませるように舐めていき、甘噛みしたりして刺激を与えていった。

# 第3話「ドラゴン使い、ククイ博士の居候」3

「ふふ、君、思ってた以上に可愛いね。だからかな、こういう事したいんだよね・・・れろ、れろ、れろ・・・」

舌先を動かして亀頭を舐めていき、根元から玉袋を舐めて、そして全体を舐めていった。

「あ、あの、ヒ、ヒガナ、さん・・・」

「お姉ちゃんって言ってくれると嬉しいな・・・」

「ヒガナ、お姉ちゃん・・・」

「うんうん、いいよ」

ヒガナは笑みを浮かべてフェラチオを続けていった。舌を巻き付けるように動かして行き、根元の裏筋を刺激していく。

「ああ、あああ、うああ、うあ、出る、もう出ちゃう、刺激が凄すぎて、あああ！」

「う、うんん！」

アサヤは堪え切れなくなって射精した。ヒガナは口の中に注がれた精液を含んで飲んでいった。

「ふふ、君の、温かくて中々コクがあるね・・・ねえ？」
　ヒガナがアサヤに近付いて微笑を浮かべて来た。
「お姉さんともっと気持ちいい事しちゃう？」
「気持ちいい事？」
「分かるんだよね、あの子達ともそう言う仲なんでしょ、どうかな？」
　ヒガナが耳元に囁いてマオやスイレンともそう言う関係なのだろうと言って来た。
指摘された事にアサヤは静かに頷いた。
「やっぱりね、じゃあ、あたしともしてみる？」
　自分とそんな仲になってみないかとヒガナがアサヤを誘って来た。
「でも、お姉ちゃん僕の事、どう思ってる？」
「好きだよ、君の事、可愛い子だなって思ってる。可愛いからどうしても構ってあげたくなって、エッチだって・・・どう、お姉さんと大人の遊びしちゃう？」
「うん、する・・・」
　少年が頷くとヒガナは笑顔になって少年の頭を撫でた。
「うんうん、じゃあ、決まりだね。じゃあ、どうしちゃう・・・」
「あの、じゃあ、お姉ちゃんの腋を・・・」
「え、腋、ふふ、君、そういうのが好きなんだね・・・いいよ」

ヒガナが腕を上げて腋を見せた。
「ふふ、私の腋をどうしちゃう?」
アサヤは頬を赤くして近付いて、ヒガナの腋を舐めて来た。舌を使って上下に動かして腋を舐めていった。
「う、うん、うふふ、君の舌のザラザラ感を感じるよ。ああ、これいいねえ・・・腋を舐められるの・・・」
ヒガナは体を震わせながらも腋舐めを受けていた。ヒガナの腋の匂い、微かに染みる汗を舐めながら胸を揉んでいく。
「ねえ、そろそろ、本番しない?」
「本番?」
「こういう事・・・」
ヒガナがショートパンツを脱いで秘所を晒した。そして壁に手を付いて後ろ向きになり、褐色の丸みのあるお尻を少年に見せて来た。微かにお尻を揺らして誘惑して来る。
「ほら、私のおまんこに、君のおちんちん、入れてみて・・・♡」
「うん・・・」
アサヤはヒガナのお尻を掴んで固く勃起して性器を秘所に擦り、そして一気に差し込

んだ。
「う、おお、うううん！」
　挿入された感覚に衝撃が走ったのか、ヒガナはうめき声を上げて感じていた。
「うう、入って来たね、君の・・・。可愛い顔して結構、凶悪なの持ってるね・・・」
　ヒガナははにかんでアサヤを見ていた。
「ヒガナお姉ちゃんのおまんこ、温かくて気持ちいい・・・」
　ヒガナの膣内の温もりを感じてアサヤは体を震わせていた。
「ふふ、感じてるみたいだね。可愛いよ、このまま二人で・・・」
「うん・・・え、えい、えい！」
　アサヤは腰を動かしてヒガナの膣内を突いていった。お尻の肉を強く掴み、必死で腰を動かして膣内を擦って抉っていった。
「は、ああ、は、あん、あん、あん、あん！」
　ヒガナは膣内で暴れて擦って来る性器の感覚を感じながら甘い声を上げていた。
「はあ、はあ、あん、いいねえ、相性抜群だね私達・・・君のとても気持ち良くて凄く最高だよ・・・」
「ヒガナお姉ちゃん、お姉ちゃんの凄く気持ちいい。おまんこの膣内、いいよ・・・！」
「夢中になってるね、それだけ私達は・・・君とはいい関係を築けそうだよ・・・」

頬を赤くして感じながら腰を動かす少年にヒガナは笑みを浮かべていた。
「お姉ちゃん！」
「あん！」
ヒガナを押し倒して仰向けにさせて抱き合うように交じり合っていく。ヒガナの胸に顔を埋めながら腰を動かして行く。
「ふふ、可愛い、いい子いい子・・・いい子だよ・・・」
ヒガナは優しく微笑んで少年の頭を撫でて受け止めていた。
「お姉ちゃん、出る、出ちゃう、僕・・・」
「いいよ、そのまま出しちゃえば？君の受け止めてあげるから・・・」
「お姉ちゃん、ああ！」
「うん、んんん、くう、熱いのが凄い流れて来てる・・・！」
少年を強く抱いてヒガナは射精を受け止めた。勢いよく流れて来る奔流を感じながらヒガナは少年を抱き締めていた。
「ふう、凄い出たね・・・」
「はあ、はあ、お姉ちゃんのおまんこに沢山出しちゃった・・・」
「いいんだよ、男の子なんだから、我慢しないで出しちゃっていいんだよ」
ヒガナは少年を撫でてあやしていた。

「あの子達、まだ戻りそうにはないよね？」
「うん、多分そうかも・・・」
「じゃあ、私と一緒に街を散策しようか？」
「いいのかな、マオ達が紹介するって言ってたけど・・・」
「大丈夫、私が付いてるから。それに、君とデートも悪くないと思ってるし・・・いいよね？」
「じゃあ、そうする・・・」
「じゃあ、決まり・・・」
　ヒガナは少年にキスをして微笑んだ。マオとスイレンが戻って来るまでヒガナとデートを楽しむ事にした。

# 第４話「優しいお姉ちゃん、ヒガナとポケモンを捕まえる」１

マオとスイレンが家の手伝いの為、しばらくアサヤと離れる事になった。その間、ククイ博士の居候となっているヒガナと二人でアーカラじまで一番賑わいのある街、コニコシティを散策していた。ヒガナは気さくで優しいお姉さんと言う印象があり、アサヤはヒガナに安心感を持つようになっていった。

「ふう、マッサージ気持ち良かったね」

「うん」

ヒガナが腕を伸ばして背伸びをしていた。アサヤも嬉しそうに頷いた。コニコシティにあるマッサージ屋のロミロミ屋でポケモン達と一緒にマッサージを受けたのだ。ヒガナもアサヤもいい気分になっていた。

「レックウザもとても気持ちよさそうだったね」

ヒガナがレックウザに笑顔で言うと一回転して喜んだような声を上げた。アサヤのメタモンも気持ちよさそうに体を伸ばしていた。

「ロミロミ屋のマッサージ屋、とても快感だったね。体が前よりも柔らかくなったように感じるよ」
「そうだね、体がほぐれていい気持ちだったよ」
「はは、お互い気持ち良くなってポケモンもいい気分でいいとこ尽くしってとこだね」
　ヒガナはレックウザを撫でて、アサヤのメタモンも抱えて優しくあやした。
「君がメタモンを持ってたのには驚いたよ」
「え、驚いたって・・・？」
「アローラではメタモンは人間になれるみたいだからね・・・」
　そう言うヒガナは怪談を話すような怖い顔になって話を続けた。
「アサヤ、聞いた話だとね、メタモンは人に化けて人間社会に溶け込んでいるらしいよ。ある時はしまクイーンになったり、ある時はおまわりさんになったり、またある時はコックになったり、お薬屋さんや、今のマッサージしてる人になったり、中には人間の言葉を喋る者だっている。もしかしたら島の人達皆が・・・」
　メタモンが人間に変身するのはマオとスイレンの絡みでも見た為、慣れてしまっていたが、ヒガナが怖く話していたため、背筋が凍る思いがした。
「いや、もしかしたら、この私も・・・う、うう、め、め、め・・・・」
　ヒガナが苦しそうに呻きだした。まさか本当にメタモンなのかと心配になった。

「ま、まさかヒガナお姉ちゃん・・・?!」
　アサヤの顔が青ざめている。自分に気さくに接してくれたお姉ちゃんがまさかポケモンだったのかと思い駆け寄った。
「・・・・なーんてね!そんな訳ないじゃん、びっくりしたでしょ、あはは!」
　しかし苦しんでいた表情と仕草から一転、体を立たせて両手を広げて笑顔を見せた。先程のあれは演技だったのだ。
「お姉ちゃん、嘘だったの!」
「そうそう、冗談だよ冗談。メタモンが人間になるのは知ってたけど、そこまではなってないから、まあ、君の驚いた顔が見たくてちょっとびっくりさせてもらったけどね」
「お姉ちゃん、人が悪いよ!僕、本当に心配してたんだからね!」
　アサヤはヒガナの胸をポカポカ叩いて目に涙を浮かべていた。
「こらこら、そう怒らないの。可愛い男の子程、からかいたくなるものでしょ、それだけ、君が可愛くて構ってあげたい。愛情の裏返しって奴だよ」
「むうう・・・」
「ははは、拗ねた顔も可愛いね。おやあ・・・?」
　ヒガナが少年の下半身を見た。
「おやおや、こんな街中で立たせちゃってるのかなあ?」

「あ、おちんちん・・・」
　見ると少年の下半身が膨らんでいた。
「いけないねえ、こんな街中で堂々と勃起させるなんて・・・」
「ごめん、マッサージが気持ち良過ぎて・・・」
「それじゃあ、仕方ないね。じゃあ、私が筆おろししてあげようかな・・・」
　そう言ってヒガナは妖艶に微笑んだ。
「付いて来て・・・」
　アサヤの手を繋ぐと町の路地裏へと入っていった。

「うふふ、こんなにはち切れるくらいに大きくさせちゃって・・・」
　ズボンを脱がして少年の勃起した性器をまじまじと見て頬を赤くしていた。少年の性器がピクピクと動いている。ヒガナは性器を手で握り、指を動かして擦ったり撫でたりしていった。
「あ、ああ、ああ、あん、お姉ちゃんの指が優しく動いてる・・・」
「感じてるね、可愛いよ。じゃあ、ちろちろちろ・・・」
　手で柄の部分を握って上下に擦りながら舌先で尿道をつついたり舐めたりしていく。柄の部分をにぎにぎしてみたり指の腹で裏筋を触ってみる。

「ふふふ、おちんちんの固さと亀頭の柔らかさが絶妙な感覚がして最高だよ・・・」
亀頭の尿道にキスをして舌先で穴を舐めていく。そして口に含んで全体を舐める。亀頭から根元までを舐めていきながら玉袋を手で握って刺激を与えていく。
ヒガナは口をすぼめて満足そうな顔をしながらフェラチオを続けていた。
「ああん、あああ、お姉ちゃんの口の中が温かくて気持ちいい・・・、おちんちん食べられてるみたいだよお・・・」
（ああ、可愛い・・・こんな可愛い顔をして感じてくれているなんて・・・）
少年の感じている顔を見てヒガナは嬉しそうな顔をしてフェラチオを続けていた。亀頭を舌で絡めたり柄の部分の裏側を舐めながら玉袋を握ったり撫でたりしていく。
「ああ、出る、出ちゃう、ああん！」
「きゃ、ううん！」
少年は堪え切れなくなってヒガナの口の中に射精した。ヒガナは口をすぼめた表情で恍惚感に満ちた顔で少年の精液を飲んでいった。
「ぷはあ、ほら見て、君の精液がこんなに・・・沢山出したんだね・・・」
ヒガナがエッチな顔で口を開けて舌にこびりついてる精液を少年に見せた。そしてそれを飲み干した。
「どう、少しは落ち着いて来たかな、君のおちんちん・・・」

「うん、大丈夫・・・」
「それは良かった・・・」
　ヒガナは優しく微笑んで少年の頭を優しく撫でた。
「外で、それも誰が見てるか分からない街の中でやるのってドキドキするよね・・・」
「うん・・・」
「アサヤ、まだ時間はあるし、どうしようか?」
「ええと、どうしよう・・・」
「悩んでるみたいだね。じゃあ、ちょっと野生のポケモンでも捕まえにいかない?」
「野生のポケモン?」
「君、まだトレーナーに成りたてなんでしょ。だから私がポケモンの捕まえ方を教えてあげようかなって思うの。どう、お姉さんが色々と教えてあげるから悪くないと思うけど?」
「うん、行ってみる」
「じゃあ決まり、それじゃあ行きますか」
　ヒガナは笑顔で少年の手を繋いでコニコシティを出た。交番を通ってお墓のあるメモリアルヒルに来た。
「さて、お偉いさんの達のお墓、メモリアルヒルだよ。どんなお偉いさんだったのかは知

らないし、どうでもいいとして、早速捕まえ方を教えてあげるよ」
そう言ってヒガナが草むらの中を歩いていった。すると草むらからタツベイが現れた。
「お、早速出て来たね。ここでボールを!」
ヒガナはボールを投げてタツベイを見事に捕まえた。
「とまあ、こんな感じだね。さあ、君も挑戦挑戦!」
「うん・・・」
アサヤも草むらに入ってポケモンを探してみた。探していると、草むらからボクレーが出て来た。
「ようし、僕も!」
アサヤがボールを投げてボクレーを入れた。そして捕まえる事に成功した。
「やった!」
「見てたよ。上々の出来だね。パチパチパチパチ!」
少年が自力でポケモンを捕まえてヒガナが拍手をした。
「じゃあ、レッスンツーで沢山ポケモンを捕まえてみる?」
「やってみるよ」
「いい子だね、頑張れ!」

　ボクレーを仲間してアサヤは次のポケモンを探した。そうしているとゴースが現れた。
「ボクレー!」
　アサヤはボクレーを出した。ゴースがしたでなめるで攻撃して来た。ボクレーはそれをかわしてたたりめでゴースを攻撃した。
「よし、行くぞ!」
　アサヤがボールを投げてゴースを捕まえた。そうして順調に手持ちを増やしていくのだった。
「アサヤ、結構捕まえたね」
「うん、見てくれてた?」
「もちろん、初めてにしては１００点満点の素晴らしい捕まえ方だったよ」
　ヒガナがアサヤのポケモンの捕まえ方を褒めていた。新しく手にしたのはボクレー、ゴース、ズバットの三体、ゴースト使いを意識した感じのチームになっていた。
「うんうん、上出来上出来♪」
　ヒガナは優しく微笑んでアサヤの頭を撫でた。ヒガナに褒められてアサヤは嬉しそうに頬を赤くした。
「じゃあ、ポケモンを鍛えるために、少し冒険でもしますか」

「うん・・・」

ヒガナと一緒にメモリアルヒルからアーカラじまのはずれへと歩いていった。

# 第４話「優しいお姉ちゃん、ヒガナとポケモンを捕まえる」２

「さて、ここで休憩しようか。一休みも大事ですからね」
　島の外れ、海が見える岸部にやって来て、ここで休憩をする事にした。ヒガナと隣同士になって一緒に海を眺めている。
「海は広いなあ、大きいなあ～～、なんてありふれた歌を歌っちゃったり・・・」
　ヒガナは海の歌を歌ってはにかんだ顔をアサヤに見せた。
「アサヤ、君はこのアローラで何をするのかな？」
「え？」
　ヒガナが真顔でアサヤにアローラのこの島で何をするんだと聞いて来た。
「人間、生きているからには目的や使命を持った方がいいからね。そうじゃないと人生楽しくないじゃん」
　そう言って笑顔を浮かべる。
「君はどんな事をして何を成し遂げるのかな・・・私、君の事が気になってね。君がどう言う人間になるのか凄い気になるんだ」

「そ、そう・・・」
「ま、君にはまだ難しいよね。まだ分からなくていい、君は好きにこの島を遊んで他の染みなよ」
そう言ってアサヤの頭を撫でて微笑んだ。
「ねえ・・・」
ヒガナが艶っぽい顔をしてアサヤの手を自分の手を重ねて来た。
「ヒガナお姉ちゃん?」
「君は本当に可愛いね。あどけなくて愛らしくて、そんな君だから情が湧いちゃうんだ・・・ねえ、ここでしちゃう?」
ヒガナがアサヤのズボンを摩って勃起させて来た。
「うん、する・・・・」
「じゃあ決まり・・・エッチしちゃおう・・・」
ヒガナに抱き着いてキスをした。
「ちゅ、ちゅ、ちゅぱ・・・」
「ぴちゃ、れろ、れろ・・・」
互いの背中を摩りながら舌を絡め合うディープキスをした。
「君の舌が私の舌を凄い舐めて、巻き付いてるよ・・・」

アサヤは舌を巻き付かせるように動かしてヒガナの舌と絡み合っていた。ヒガナもアサヤの口を吸ったり歯茎や上顎を舐めたりしていく。互いの肌の感触や匂いを感じながら舐めていく。
「ヒガナお姉ちゃん・・・」
キスを終えてアサヤがヒガナの腋に顔を近付けた。
「あん、君ったらまた・・・そんなに私の腋を舐めたいの？」
「うん・・・」
「もう、これ結構恥ずかしいんだよ・・・」
恥ずかしがりながらも腕を上げて腋を見せた。アサヤはヒガナの腋の匂いを嗅いで舌で舐めていった。
「ヒガナお姉ちゃんの温かい匂いが広がって、凄いいい匂いがする・・・」
「そんな恥ずかしい事言わないで、終わりにしちゃうよ？」
「ご、ごめんなさい・・・」
「もう、君は可愛い顔した変態さんなんだから・・・そんな悪い変態君は・・・」
「あ！」
ヒガナがアサヤの性器を握って来た。
「女の子の腋で発情しちゃう悪い悪い男の子はこうしてしこしこの刑をしてあげるんだ

から！」

そう言ってアサヤの性器を握って上下に動かして扱いていった。

「ああ、ヒガナお姉ちゃんの手が僕のおちんちんを凄い扱いてるよ・・・」

強く握ったかと思えば弱めに握ったりして扱いていくヒガナの手コキにアサヤは堪えながらヒガナの腋を必死に舐めていた。

「ふふ、私の腋をペロペロしながら射精しちゃいな・・・しこしこ、しこしこ、し～こしこしこ！」

ヒガナが手の動きを早くしていった。

「んああ、ヒガナお姉ちゃんの手で、ああ！ヒガナお姉ちゃん！」

アサヤは堪え切れなくなって射精した。精液が勢いよく飛んで地面を汚していく。

「おお、凄い出たね。そんなに気持ち良かったんだ・・・」

少年の射精にヒガナは驚いていた。

「一杯、びゅっびゅって出しちゃったね・・・君の可愛い声と仕草を見てたら私も興奮して来ちゃった・・・」

ヒガナが仰向けになって足を開いて来た。

「ほら、私と一緒に本番しちゃおう？」

笑みを浮かべて少年を誘って来る。

「アサヤ、最後まで楽しんじゃおう？」
「うん・・・」
　ヒガナの太腿を掴んで性器を秘所に入れた。ヒガナに抱き着くと彼女は太腿を絡ませて逃がさないようにした。
「うああ、ヒガナお姉ちゃんのおまんこ、締め付けが良くて気持ちいい・・・」
「ふふ、感じてるね。私も君のおちんちんの固い感じが凄い好きだよ。じゃ、このまま・・・あん！」
「お姉ちゃん！」
　アサヤは腰を激しく動かしてヒガナの膣内を突いていった。ヒガナの膣内がアサヤの性器を締め付けて刺激を与えていく。
「うああ、ヒガナお姉ちゃん！」
　アサヤは快感に堪えながら激しく腰を動かして突いていった。
「ふふ、凄い感じてるんだね。可愛いよ、そのまま、夢中で突いていって・・・！」
　ヒガナと抱き締め合い、舌を絡ませるキスをしながら突いていく。
「うああ、ああ、凄い、君のが奥に当たってる！」
　体位を変えて騎乗位になり、ヒガナが少年の上に跨って腰を振っていた。動く度にヒガナの太腿が少年の腰に当たって弾ける音がしていく。

「ヒガナお姉ちゃん、気持ちいい！」
「うん、私も気持ちいい！」
対面座位になり、ヒガナの尻を掴んで触りながらキスをして付いていく。
「アサヤ、可愛いよ、可愛いアサヤ、好きだよ・・・」
「うん、僕も・・・」
「ああ！」
正常位に戻ってヒガナを突いていく。
「お姉ちゃん、イクよ、お姉ちゃんのおまんこに出しちゃうよ！」
「いいよ、来て、来て、私のおまんこに出しちゃって！」
舌を伸ばして感じながら射精を求めた。
「ヒガナお姉ちゃん～～～!!!」
「ああ、イク～～～！イっちゃう～～～!!!」
ヒガナはアヘ顔になって感じながら少年の膣内射精を受け止めた。
「は、ああ、ああ、感じる、君の熱い精液、感じる・・・！」
少年に強くしがみついて精の熱を感じていた。
「はあ、凄い気持ちいい・・・」
「アサヤ、凄く感じてくれたみたいだね。君が快感になってくれたら私も嬉しいよ・・・」

性器を引き抜いて余韻に浸っているアサヤを見てヒガナは満足そうに微笑んでいた。

「ふう、とても気持ち良かったね・・・」

「うん・・・」

ヒガナと一緒に寝転んで休憩していた。ヒガナはアサヤに微笑んでエッチした感想を言った。

「君とこういう関係になれて、私、凄く幸せ･･･誰かと仲良しこよしする気なんて無かったけど、君は特別だよ・・・」

ヒガナは優しく微笑んで少年の口に指を当てた。

「じゃあ、ここで寝転んで、そしたらまた進もうか?」

「うん、そうする・・・」

「それじゃあ、お休みのキス・・・ちゅ♡」

アサヤにキスをして微笑む。二人は島の外れでしばらくまどろんでいた。

# 第5話「しまクイーンライチの憂鬱、メタモン達との4P」1

アーカラじまの外れで休憩を取った後、アサヤとヒガナは更に奥へと進んでいった。その先には遺跡があった。

「はい、ここがこの島の守り神とされているカプ・テテフが眠っているとされている遺跡だよ」

ヒガナが遺跡をアサヤに紹介して珍しい物を称賛するように拍手した。

「ヒガナお姉ちゃん、詳しいんだね」

「ま、ククイ博士から聞いただけなんだけどね。聞いた話だとしまめぐりをする子供は守り神からその証を貰わないといけないみたいだね」

そう言えば前世の記憶でそんな設定を聞いた事がある。アサヤはそう思い出した。

「選ばれた者がしまめぐりを出来て選ばれなければその時点で詰んだ。結局は神様に気に入られなかった時点で終了、選ばれればラッキーってとこだね」

ヒガナはアサヤに近付いて瞳を覗いて来た。

「君は神様に選ばれるのかな。私は色々あって何とかレックウザに選ばれたけど、君の

場合はどうなんだろうねえ・・・」
「そう言われてもピンと来ないな・・・」
「ま、小さな君にはまだ難しいだろうね。今言った事は気にしないで、君はこの島を好きに冒険してればいいんだから。道中では私が付いてるんだし、安心して」
　そう言って笑顔でアサヤを撫でて安心感を与えてあげた。
「そうだね、折角ここまで来たんだし、遺跡の中を見て見ない？」
「でも、入れるかな？」
　ゲームではカイリキーのライドが必要で簡単には通れない設定になっている。自分はまだアーカラじまを旅したばかりでライドも持っていない。
「大丈夫、私にはレックウザがいるんだから。何とかなりますよ、と言う訳で行ってみようか」
　ヒガナに押される形で遺跡へと入ろうとした。
「うわあ、強すぎる～～！」
「ごめんなさ～～い！」
　すると遺跡から眼鏡を掛けた悪党達が出て来て一目散に逃げて行った。
「何だろう？」
　ヒガナが首をかしげていると褐色肌の豪快さのある大人の女性が出て来た。

「あんた達がカプの遺跡を荒らすなんて１０年早いんだよ！何度来たってあたしが返り討ちにしてやるさ！」
　女性はそう言って仁王立ちしていた。そうしているとアサヤ達と目が合った。
「おや、あんた達は？」
「ご心配なく、あの悪党達とは何も関係はありませんから。只、ちょっとばかし遺跡を見て見たくて・・・」
「ふうん、まあ、見た感じ、悪い人間じゃなさそうだね・・・。アローラ、あたしはライチ、アーカラじまのしまクイーンで四天王をやってるのさ」
　先程の勇ましい表情から一転、気さくな笑顔でアサヤとヒガナに挨拶した。
「私はヒガナ、ククイ博士の居候してますよ」
「へえ、ククイ博士と一緒に暮らしてるって言う子はあんたかい、で、そちらの坊やは？」
　ライチに声を掛けられてアサヤは緊張した。大人の、それも気が強そうな女性と普通に話したり接した経験が無かったためしどろもどろになってしまう。
「僕、アサヤです・・・」
「アサヤ、ああ、マオ達の言ってた新しいお友達って言うのはあんただったんだね」
　ライチが思い出したような驚いた表情をしていた。
「僕を知ってたんですか？」

「ああ、マオとスイレンがよく話してくれたからね。そうかい、あんたがアサヤか。なあ、あんた達、今暇だろう。ちょっと手伝ってくれないかい？」
「手伝う？何をですか？」
「ああ、何だか面倒な事になりそう・・・」
　笑顔で手伝いを求めるライチにヒガナは後悔し始めていた。
「やれやれ、前言撤回、遺跡に来てみればお掃除なんてね・・・」
　ヒガナは溜め息を吐きながらほうきを掃いていた。遺跡ではほうきで塵を取ったり雑巾で拭いたりして綺麗にしていく。
「守り神様の大事な遺跡だからね。こうして綺麗にしてあげるのも大事なんだよ」
　ライチは雑巾で装飾品を拭きながら掃除するやりがいを語っていた。
「アサヤ、掃除するの面倒じゃない？」
　ヒガナがアサヤに掃除は面倒かと聞いたがアサヤは首を横に振った。前世では掃除は好きだったしそれ程苦には感じなかった。寧ろ遺跡を掃除出来て嬉しく思っていた。
「ふう、余程人がいいのか、ボランティア好きなのか、まあ、こう言うのも悪くは無いけどね・・・」
　ヒガナと一緒に掃除していき、遺跡を綺麗にしていった。

「ありがとう、あんた達のお陰で手間が省けたよ。カプ・テテフも喜んでいると思うよ」
ライチが笑顔でアサヤ達に感謝した。ライチに礼を言われてアサヤもヒガナも悪い気はしなかった。
「ねえ、アサヤ」
「はい？」
ライチがアサヤの背までしゃがんで聞いて来た。
「あんた、どこに住んでるの？」
「ええと、どうしてそれを？」
「キャプテンのお友達の事、詳しく知りたいと思ってね。親はいるのかい？」
ライチの言葉にアサヤは戸惑ってしまう。転生した身で親はいない。孤児として生まれたようなものだ。家も親も無い身である。しかしアサヤは正直に話した。
「僕、親はいなくて、カヒリさんのリゾートでお手伝いとして暮らしているんです」
「そうかい、親はいないのかい。可哀想にね、でも、それに挫けずに頑張ってるの、凄いと思うよ」
そう言ってアサヤの頭を撫でて微笑んだ。
「ありがとうございます・・・」
「アサヤ、親はいなくてもあんたは一人じゃないんだ。マオにスイレンって言うお友達

がいるんだから、あの子達に色んな事を教えてもらいなよ。それに、あたしも色々と教えてやるからさ」
「はい・・・」
「所で、アサヤ、あんたリゾートでお手伝いとして働いているんだよね？」
「そうですけど・・・」
　ライチがリゾートの事を聞いて来た。何だろうとアサヤは首をかしげている。
「ねえ、そこでいい男とかいなかったかい？」
「いい男？」
「あ、まあ、何て言うか、あたしもお付き合いをしたい歳だから、いい男との出会いも欲しくてね。そう言う人がいないか聞いてみただけさ」
「う～ん、僕もそこまでは・・・」
「うんうん、まだあんたには難しいよね。今のは忘れて頂戴」
　ライチはしゅんとなって少年から視線を反らした。
「まあでも、あたしはあんた達子供達のお母さんでもあるんだ。あんた達の幸せを見守るのも悪くないと思ってる。だからアサヤ、この島をうんと好きになってくれると嬉しいね。じゃ、お掃除ありがとう。あたしは行くね」
　ライチは一足先にコニコシティへと帰っていった。

「あの人も色々と抱えてそうだね」
ライチが去った後、ヒガナは彼女も色々と欲求があるみたいだと思った。
「あれ、アサヤ、これ」
ヒガナが遺跡に置かれていたほうきを手に取った。
「あの人の忘れ物だね。返しに行ってこようか」
「うん、そうだね」
アサヤとヒガナは急いでコニコシティへと走っていった。しかし二人は気付いていなかった。アサヤのメタモンがライチの抱えている欲求に気付いて密かにボールから抜け出していた事を。しかしそれがアサヤに思わぬラッキーを与える事になるのである。

# 第５話「しまクイーンライチの憂鬱、メタモン達との４Ｐ」２

「はあ・・・」
　自宅のジュエリーショップに戻ったライチは寝室に入ってベッドに寝転んだ。寝るベッドには大量のヌイコグマのぬいぐるみが沢山転がっていた。
「あの子達の前ではああ言っちゃったけど・・・」
　ヌイコグマのぬいぐるみを抱き締めながらアサヤ達の前で言った事を思い出していた。子供達の前では心配はかけさせまいと気丈に振舞っていた。
「島のお母さんだって言ったけど・・・ああ、やっぱり彼氏が欲しい、欲しいよ！」
　グルグル回って本心をぶつける。
「はあ、あたしこんなにいい女なのに何で彼氏が出来ないんだろ・・・」
　気が付くと、自分の胸を揉んで自慰行為をしていた。
「あ、あ、あ、胸だって結構あるし・・・はああ、こんないい体してるのに何で出来ないんだよお・・・・」
　胸を強く揉んでいき、乳首を指で摘まんで引っ張ったりした。

「ひゃああ、ああ、乳首も綺麗でいいおっぱいしてるのに何で・・・！」
胸をいじり、腹を摩っていきながら手を下の方へと伸ばし、ショートパンツの中に手を入れて秘所を指でいじっていった。
「は、あ、ああん、ああ～～、ああん、あん、おまんこもすぐ濡れちゃうほどいい女だって言うのに誰もあたしを女にしてくれない、欲しい、欲しい、彼氏が欲しい・・・！」
ベッドの上で切ない声を上げ続けている。
「め、め・・・・」
「え、きゃ！きゃあああああ！何であたしがもう一人?!」
自分を見ている存在に気付いてライチが驚愕した。そこには自分と同じ姿をしたもう一人の自分がいたからだ。
「嫌、これは、どう言う・・・」
「めたもる！」
「きゃあ！」
もう一人の自分、いや、アサヤのメタモンがライチを押し倒して胸を揉んで来た。
「ああ、きゃあ、怖い、自分に犯される、あん、あん・・・」
「もるもるもる・・・・」
メタモンは上機嫌でライチの胸を揉んでいった。生地を捏ねるように回しながら揉

んだり強く掴んでぐにゃりと曲げたりしていく。
「ひい、いい、きゃあ!」
　そして乳首を摘まんで引っ張っていった。
「ああ、それはダメ、ああやめて・・・」
　ライチは切なそうな声を上げていたがメタモンはお構いなしに続けて行く。ライチの片足を上げて秘所を自分の秘所とくっ付けて擦っていった。
「ああ、ああ、あたしのおまんこが擦れ合って、いい、いい、ああん・・・!」
　自分に擬態したポケモンに犯されている。それもレズエッチをされている光景にライチは興奮していた。互いの秘所、クリトリスが擦れ合っていい気持ちになる。
「ああ、ああ、ああ!ああ～～～～ん!!!」
　ライチは絶頂を迎えて果ててしまった。息を吐いてメタモンを見つめている。
「あんた、誰なの。どうしてあたしに・・・?」
　ライチが言ってもメタモンは微笑んでいるだけだった。
「ライチさん、忘れ物、あ・・・」
「おお、これは・・・」
　そこへアサヤとヒガナが入って来た。忘れ物を届けに来たのだが、思わぬタイミングにアサヤとヒガナは驚いていた。

「あ、やだあ、あんた達、見ちゃダメえ！」
　二人に見られてライチは頬を赤くして恥ずかしがり、両手で顔を隠した。
「ライチさんが二人・・・」
　アサヤがもう一人のライチを見ると、彼女はニコリと頷いた。
「メタモンなの？」
　自分のメタモンなのかと聞くとメタモンは頷いた。
「おやおや、君のメタモンがこのお姉さんに何の風の吹き回しかな？」
「あんた達、お願い、今のあたしを、いやあん！」
　メタモンがライチを抱えて足を広げさせてきた。抱えられて足を広げられてライチは恥ずかしがっていた。秘所が濡れていて蜜が垂れているのが見えた。
「ああ、いやあ、恥ずかしい、アサヤ、見ないでえ・・・」
「めたもる、めたもる」
　メタモンがアサヤにやるなら今だと言うように声を掛けて来る。
「メタモンが誘ってるみたいだね。やっちゃいなよここまで来たら」
「うん」
　ヒガナに言われてアサヤはライチに近付いた。
「あ、坊や・・・アサヤ・・・」

「ライチさんのおまんこ、ひくひく動いてる・・・」
　大人のお姉さんのおまんこをまじまじと見てアサヤは興奮していた。
「嫌、見ないで、恥ずかしい・・・」
　ライチは両手で顔を隠して恥ずかしがっていた。アサヤはライチの秘所を舐め始めた。少年の舌が蠢いている部分を舐めて刺激を与え、蜜を溢れさせていく。
「ああ、きゃああ、おまんこ、おまんこを男の子に舐められてるの。いい、ひゃああん、おまんこ舐め舐めされて・・・！」
　ライチは首を振って歯を食いしばって感じていた。舌先でつついたり、キスして吸うように舐めていく。
「ライチさん・・・」
「え、ああ、あああ・・・」
　アサヤがライチの秘所に性器を当てて来た。秘所を性器で擦って滑りを付けて行く。
「ライチさん、僕が彼氏になってあげる。だから・・・」
「あんた・・・ああ、もういいよ。あんたでもいい、あたしの気持ち、受け取って・・・」
　少年に求められて嬉しいのか、それとも気持ちが麻痺してどうにでもなれと思っているのか、ライチはアサヤを受け入れる事にした。ライチの秘所に性器を入れて膜を破っていった。

「ひゃあああ、きゃあ、ああ！」
　膜が破かれて血が流れていく。ライチは両手を握って歯を食いしばって痛みに耐えていた。
「ライチさん、大丈夫？」
「あ、ああ、大丈夫だよ。あたしはしまクイーンなんだから、これぐらいの痛み、平気だよ。さあ、アサヤ、あたしのおまんこで動いて・・・？」
　ライチが穏やかに微笑んでアサヤの頬に手を添えて動くよう求めた。少年は頷いて腰を動かしてライチの秘所を突いていった。
「ああ、ああ、あん、男の子のおちんちんがおまんこで動いてるの！あたしのおまんこをこじ開けるように激しく動いて、いいい、ひいん、これ、気持ちいい、気持ちいいの～～～～!!!」
　ライチは舌を伸ばしてアへ顔になって感じていた。
「めためた」
　メタモンがライチをベッドに寝かせて仰向けにさせるとその上に跨って秘所をアサヤに見せて来た。自分にも入れて欲しいと誘っているのである。
「メタモン・・・」
　アサヤはその気持ちを感じ取ってライチの秘所から性器を引き抜いてメタモンの秘

所に入れていく。
「めめ、めめえ～～～！」
　入れられてメタモンは喘ぎ声を上げて感じていた。アサヤはお尻を掴んで何度もメタモンの膣内を突いていく。メタモンの膣内は収縮するように動いていて、アサヤの性器を締め付けたり緩めたりしていく。
「もん、もん、もおん！」
「メタモン、メタモンも気持ちいいよ！」
　メタモンの膣内の感覚に気持ちよく感じながらも再びライチに入れていく。
「ああん、またおまんこに、アサヤの気持ちいいの！」
　そうしていきながら一人と一匹の膣内を味わい、二人に精液を注いでいった。
「んあああ～～～～！」
「もるる～～～～！」
　膣内射精を受けた二人はぐったりと倒れて息を吐いていた。アサヤは疲れから呆然としていたがエッチはまだ終わらない。
「アサヤ、君の行為を見てたら私の興奮して来たよ・・・」
　ヒガナがベッドに仰向けになって足を開いてアサヤを誘って来た。
「アサヤ、私にも、ね♡」

「うん・・・」

アサヤは息を呑んでヒガナの太腿を掴み、性器を秘所に当てた。

# 第５話「しまクイーンライチの憂鬱、メタモン達との４Ｐ」３

「ヒガナお姉ちゃんともエッチする・・・！」
　アサヤはヒガナに抱き着いて性器を秘所に擦り付けた。
「ふふ、そうこなくっちゃ！」
　ヒガナははにかんだ笑顔でアサヤを抱き締めた。
「入れるよ・・・」
「うん、そうだよ、そのままゆっくり、ね・・・♡」
　秘所に亀頭を当ててゆっくりと入れて飲み込ませていく。
「あ、あ、ああ、あ、あ、あ、あ、ああ！」
　膣内に性器を根元まで差し込んで腰を動かした。
「ああ、ああ～～ん、は！」
　ヒガナはシーツを握って快感に喘いでいた。ヒガナの感じている顔を見ながらアサヤは腰を動かして気持ちよくさせていった。
「はあ、ああ、君って可愛い顔してるのに、下の方は結構凶悪だね・・・」

「ごめん、いけなかったかな・・・」
「そんな事ないよ。逞しいから褒めてあげたんだよ」
ヒガナがアサヤの頬に手を添えて微笑んだ。アサヤは夢中で腰を動かして行きながら胸の乳首を吸っていった。
「うふふ、おっぱい吸っちゃって可愛いね・・・」
腰を振って胸を吸っている少年の頭を優しく撫でながら攻めを受けていた。ヒガナの匂いを感じながら少年は乳首を吸って腰を動かし彼女を突いていく。体位を変えて後背位となり、ヒガナのお尻を掴んで後ろから突いていく。
「んああ、ああ、ああん、おまんこの膣内でおちんちんが凄い暴れてる、奥へ奥へと刺さって来てるよ！」
ヒガナはアヘ顔になって喘いでいた。
「ヒガナお姉ちゃん、イク、イクよ！」
「うん、私もイク、イっちゃう！」
二人共、絶頂を迎え始めていた。腰を更に激しく動かしてラストスパートに入っていく。
「ヒガナお姉ちゃん、ああ！」
「ああ～～ん、君の精液が流れて来てる～～!!!」

奥へと突き立てて膣内へと射精していく。ヒガナはシーツを強く握り締めて顔を上げて絶頂していきながら少年の射精を受け止めていた。
「はあ、あはあ・・・」
アサヤが性器を引き抜くとヒガナはぐったりと倒れ込んだ。ヒガナはアサヤに微笑んでいた。
「はあ、君の精液がこんなに沢山・・・凄くいいよ・・・」
ヒガナの秘所から注いだ分の精液が溢れていた。アサヤはそれを見ながら息を吐いていた。気が付くとメタモンも元の姿に戻っていた。

「あの、ライチさん・・・」
「アサヤ・・・」
ライチが目を覚ましてアサヤを見つめていた。
「ごめんなさい、僕のメタモンが・・・」
「いや、あんたは悪くないよ。忘れ物をしたあたしもいけなかったからさ・・・」
「ライチさん、あの・・・」
「あたし、彼氏が欲しいんだよね・・・。あんた達の前では心配をかけまいと気丈に振舞ったんだけど、やっぱりこの気持ちだけは抑えられなくて・・・」

「あの、もしよかったら、僕じゃ、ダメかな？」
「え、あんたが・・・？」
　アサヤがライチの恋人でどうかなと言った。前世の記憶でライチの設定については知っていたので自分が叶えられるかもしれないと思ったからだ。
「アサヤ、あたしの事を思ってくれる気持ちは分かるよ。本当に好きなのは伝わって来る。けど、ごめんね。あたしは大人のお姉さんなんだ。あんたが大人になった時はおばさんになっちゃってるよ」
「それでも構わないよ。容姿なんて・・・」
「そうだよね。けど、あんたにはいいお友達もいる。あたしよりもいい人を見つけられる。あたしを気遣ってくれているのは嬉しいよ。でも、あんたの将来を考えると、この気持ちは受け止められない。ごめんね、でも、あんたのお母さんでいられるから・・・」
　そう言ってライチはアサヤを優しく抱き締めた。
「ごめんね、そしてありがとね。あんたを可愛い子供のように思っているから・・・」
　ライチと別れてアサヤはヒガナと一緒に街を歩いていた。
「やれやれ、失恋しちゃったね・・・」
　ヒガナは残念そうな顔をしてアサヤを見ていた。
「うん、ライチさんがそう言うなら仕方ないよ」

　ククイ博士の素直じゃないと言う台詞を思い出していた。自分を気にかけて将来を思って拒んだのだと少年は思った。フラれてしまったと言う気持ちになって少年は切ない気持ちになっていた。
「アサヤ！」
「アサヤ～～！」
　すると聞きなれた声が聞こえて来た。顔を上げるとマオとスイレンが手を振っていた。
「マオ、スイレン！」
　二人はアサヤに駆け寄った。
「ごめんね、心配だった？」
「うん、寂しかったよ・・・」
「でも大丈夫、お店の手伝いも終わったから、またアサヤと一緒に島を旅出来るよ」
「また貴方と一緒で嬉しいです」
　マオとスイレンが優しい笑顔をアサヤに向ける。アサヤは二人の笑顔に救われた気持ちになった。
「それじゃあアサヤ、次はあそこに行こうか？」
「あそこ？」

「そう、とっても楽しい所だよ、ねえスイレン」
「ええ、可愛いあのポケモン達が沢山います」
マオとスイレンの言うあの場所について早くも気になっていた。
「じゃあ、アサヤ、一緒に行こう！」
「うん！」
いつの間にか少年の顔に笑顔が戻っていた。マオ達と一緒に走っていった。

# 第６話「ピカチュウのたに、スイレンの特別衣装」１

　家の用事を済ませたマオ達と合流したアサヤ。マオとスイレンに誘われて次の名所へ行く事にした。ディグダトンネルからカンタイシティへと通り、４番道路を進んでいた。

「アサヤ、次に行く場所はとっても楽しい所だからね」

「そうなの、マオ？」

「はい、あのポケモンが沢山いるんですよね」

「そうだね～」

　スイレンとマオが顔を合わせて相槌をした。

「どんなポケモンか楽しみだね。まあ、私はのんびり出来ればいいんだけどね」

「ヒガナお姉ちゃん、あんまり楽しみじゃない？」

「そうじゃないよ、どのポケモンもいいと思うし、それに私は大人だから落ち着いた感じが好きだからさ」

　そう言って大人っぽく振舞ってみる。

「ヒガナさん、流石大人って感じだね」

「そこに憧れちゃいます」
「え、そう、あはは、素直な子達だねえ～～」
ヒガナはスイレンの頬をつついて微笑んだ。
「ほら、着いたよ」
マオが指を差すとある入り口に付いた。アサヤ達はそこを通って奥へと進んでいく。
「アローラ、皆、元気にしてた?」
その場所に付いてマオが手を振ると、黄色いネズミのポケモン達が群がって来た。
「うんうん、皆、元気一杯だね」
「ピカチュウ?」
アサヤはピカチュウが沢山いる事に驚いていた。
「いやあ、これは驚いた。辺り一面、ピカチュウだらけだね」
ヒガナも同様にピカチュウの多さに驚いていた。
「そうだよ、ピカチュウが沢山いる谷、ピカチュウの谷だよ」
「ここでピカチュウと触れ合う事が出来るんですよ」
マオとスイレンがピカチュウを抱えてピカチュウの谷であると説明した。
「やあ、キャプテンマオ、スイレン、また遊びに来てくれたんだね」
ピカチュウの谷を守るトレーナーが笑顔でスイレン達に声を掛けた。

「アローラ、遊びに来ました！」
　マオが元気よく挨拶した。
「ここでピカチュウの数を数えたり、のんびりしていってくれ」
　トレーナーに言われてアサヤ達はのんびりする事にした。マオはピカチュウ達の為にカレーを作る事にして、アサヤとスイレンはピカチュウの数を数えて遊んでいた。
「ヒガナお姉ちゃん、どうしたんだろう？」
　アサヤが見るとヒガナはピカチュウ達から離れた場所でヤシの木にもたれて休憩していた。
「ヒガナさん、一緒にピカチュウの数を数えませんか？」
　スイレンが誘うもヒガナは笑顔で言った。
「ああ、気にしなくていいよ。私はここでのんびりしているから、君達子供はゆっくり遊んでて」
　そう言って背もたれしながらひと眠りした。
「ヒガナさん、流石大人って感じですね。群れないクールさが素敵です」
「そうなのかな？」
「アサヤもきっと分かりますよ。さあ、ピカチュウの数を数えましょう」
　スイレンと一緒にピカチュウの数を数えていく。昼寝しているピカチュウ、じゃれ

合っているピカチュウ、走り回っているピカチュウ、色んなピカチュウ達を数えていく。
「スイレン、何か退屈だね」
「そうですね、数を数えるだけって言うのも物足りないですよね」
アサヤとスイレンが次はどんな遊びにしようかと考えた。
「誰かー!ピカチュウ泥棒よ!」
するとトレーナーの叫び声が聞こえて来た。
「アサヤ、行ってみましょう」
「うん」
二人は急いで声のする方へと向かった。
「ピカチュウちゃんは僕が頂いていくぞ!」
見ると眼鏡を掛けただいすきクラブの男がピカチュウを奪おうとしていた。
「オニシズクモ!」
スイレンはオニシズクモを繰り出してみずでっぽうを飛ばした。
「うわあ!」
みずでっぽうは男に命中してピカチュウを離した。
「何だ君達は!僕の邪魔をするなら許さないぞ!」
男はアローラゴローンを繰り出して来た。

「アサヤ、懲らしめてあげましょう！」
「分かった！」
　アサヤはボクレーを出して迎え撃った。アローラゴローンがロックブラストを飛ばして来ると、ボクレーはこれをかわして、えだづきで攻撃した。そこへスイレンがオニシズクモにねっとうを指示してアローラゴローンを倒した。
「うわあ、やられた！」
「さあ、まだ来ますか！」
「待って、僕はもうブレイク団じゃないんだ。只のピカチュウ大好きおじさんなんだよ！」
「それじゃあ、何故ピカチュウを奪おうとしたんですか？」
　スイレンが理由を尋ねると男は言った。
「僕はピカチュウが大好きなんだけど、実際に仲良くなろうとする勇気が無くて、でも他の皆が仲良くしているのを見て羨ましくなっちゃって・・・」
「そうですか。でも自分から進んで仲良くならないと相手に気持ちは伝わりませんよ？」
「そうだったね、よし、じゃあ、頑張ってみるよ」
　男は勇気を出してピカチュウ達の群れに入った。そして愛想よく、気さくに挨拶して

みる。するとピカチュウ達が進んで男に近付いて遊ぼうと誘って来た。
「あ、あはは、こんな簡単に仲良くなれるんだ！僕でもやれば出来るんだ！」
男は喜んでいた。それを見てアサヤとスイレンは無事解決したと安心した。
「皆、出来たよ！」
マオが料理が出来た事をアサヤ達に伝えた。ピカチュウ達と一緒にカレーを美味しく食べてのんびり昼寝をする。
「アサヤ・・・」
「スイレン？」
寝転んでいるとスイレンが声を掛けて来た。
「ちょっといいですか？」
「うん、何かな？」
起き上るとスイレンが手を繋いで来た。
「貴方に私の秘密を伝えたくて・・・」
「秘密？」
「来て下さい・・・」
スイレンに連れられて、人気のない水辺に来た。
「アサヤ、実は私、ピカチュウなんです」

「ピカチュウ?」
　自分はピカチュウだと言ったスイレンにアサヤは首を傾げた。
「ピカチュウが人間の姿になっているのです・・・だから貴方に私の本当の姿を・・・」
　そう言うとスイレンは衣類を脱いで全裸になった。そして用意したであろう違う衣装を着た。
「スイレン・・・」
「これが私の本当の姿です、ピ、ピカチュウ・・・♡」
　そこにいたのはピカチュウの耳の付いたヘアバンドを付けて尻尾の付いた黄色のレオタードを着た、しなやかな腕とエッチな太腿が映えるスイレンだった。
「でもそれ、ピカチュウのコスプレをしただけじゃ・・・」
「違います、私はピカチュウです、ピカチュウ♡」
　スイレンがアサヤの体に抱き着いてキスをした。
「アサヤ、本当の姿の私と、エッチしようピカ・・・♡」
　スイレンは頬を赤くして太腿をもじもじさせて誘って来た。ピカチュウのコスプレ、それも大胆なエッチな衣装で誘惑されてアサヤは唾を飲み込んだ。スイレンにキスをしてディープキスをした。

# 第6話「ピカチュウのたに、スイレンの特別衣装」2

「ん、ちゅ、ちゅ、んんふ・・・」

アサヤと口をくっ付けて舌を絡め合うキスをしていく。口を少し離すと、アサヤとスイレンの口から舌が微かに出ていて巻き付くように蠢いていた。互いの柔らかい舌を巻き付け、唾液を混ぜ合う。口を離して再び舌を絡め合うキスをする。その間にスイレンは太腿をもじもじ動かしていた。

「ぷはあ、ああ、アサヤ、ピカチュウのキス、どうピカ?」

「うん、とても気持ちいいよ・・・」

「良かったピカ、それじゃあ・・・」

スイレンがかがんでアサヤのズボンのチャックを開けると性器を出して手で扱いて来た。

「アサヤのおちんちん、気持ち良くさせてあげるピカ。まずはしこしこでんじは攻撃ピカ」

アサヤの性器を握り、裏筋を指で押して刺激していく。

「うああ、ああん、スイレンの手コキ、最高過ぎる、あん、これ、凄い・・・」

「アサヤ、まひしちゃダメですよ・・・まだ私がしていますピカ・・・」
　手で扱きながらアサヤの亀頭にキスをした。
「ピカチュウの頬袋に入れちゃうピカ・・・」
　アサヤの性器を口に含んで頬に押し当てて舐めていった。スイレンは顔を動かしながらアサヤの性器を舌を動かして巻き付けるように舐めていった。スイレンが顔を小刻みに動かしている為、性器が頬に当たってこぶを作っていく。頬袋に食べ物を押し当てるような感じで性器を舐め回していた。
「スイレン、スイレンの口の中、最高だよ・・・堪らないよお・・・」
（アサヤ、私のフェラチオで感じてくれてる、頑張らないと・・・）
　スイレンは玉袋を握りながら竿を舐めていく。球を握ったり離したりしながら刺激を与えていきながら口をすぼめながら舐めていく。
「ああう、ダ、ダメえ、出る、出ちゃう、あああ！」
　アサヤに限界が来てスイレンの口の中に精液を流し込んでいった。
「う、うんん!!」
　スイレンは苦しそうに顔を歪めながらもアサヤの精液を飲み干していく。
「スイレン・・・」
「アサヤの精液、いいお味ですピカ・・・」

スイレンは優しく微笑んでいた。
「スイレン！」
「きゃ！」
スイレンに抱き着くとレオタード越しにスイレンの乳首をいじった。
「ああ、あん、アサヤ、乳首をいじっちゃ、いやん、ピ、ピカ・・・」
「スイレン、今度は僕が気持ちよくさせる」
いじっていくと乳首が突き出て来た。スイレンの乳首を指で転がしたりつついたりしていく。更に円を描くように指を回してみたり、押したりしていった。
「スイレンの乳首、舐める・・・」
そしてもう片方の乳首も舌で舐めたり吸ったりしていく。スイレンは体を小刻みに振るわせてアサヤの乳首攻めを受けていた。
「きゃあピカ、アサヤ、そこは・・・！」
スイレンのレオタードをずらして秘所を舌で舐めていく。
「あ、あん、ダメ、いや、あん、おまんこペロペロされちゃってるピカあ・・・」
蠢いている膣を舌で舐めて刺激していき、垂れていく蜜を味わっていく。
（ああ、私、アサヤにおまんこペロペロされてるピカ、でも、大好きなアサヤなら、平気ピカ・・・）

アサヤのクンニをスイレンは嬉しそうに受けていた。スイレンを仰向けに押し倒してそのままクンニしていく。
「ピカ、ピカ、ああんピカあ、おまんこ気持ちいい、アサヤの舌好き・・・」
スイレンは体を揺らして喘ぎ声を上げながら感じていた。舌を離してスイレンの足を掴んで触っていく。程よく肉の付いた足の柔らかさを感じながら舌で舐めて肌の触りを楽しんでいく。
「スイレン・・・」
「ふにゃ、ピカ・・・」
アサヤは性器をスイレンの秘所に当てた。
「スイレンのおまんこに入れるよ?」
「ええ、どうぞ入って来てピカ・・・」
スイレンの誘いに応じてアサヤは膣内に性器を差し込んだ。
「ピカああ、おちんちんが、おちんちんが私の、ピカチュウのおまんこに入ってるピカあ・・・」
「スイレン、動くよ!」
「はい、ピカ、ピカ、ピカあああ!」
腰を動かしてスイレンの膣内を擦って荒らしていく。スイレンの膣内の肉がアサヤ

の性器で擦れていき、押し広げられていく。
「んああ、ああん、アサヤのが大きくなって擦れてるピカあ！」
「スイレン、スイレンのおまんこ、凄く気持ちいいよ！」
「アサヤ、私はピカチュウピカ、だからこれは人間同士じゃなくてポケモンと人間のエッチピカ！」
「でも、そうだったとしても気持ち良くて止められない！」
「はい、私も・・・・！」
　スイレンの膣内を突いていきながらキスをしていく。
「アサヤ、私と貴方で異なる種族同士のエッチをしてます。アサヤ、アサヤあ、私にアサヤのタマゴを産ませてピカあ！」
「うん、産ませる、僕のタマゴをスイレンに孕ませる！」
　アサヤは激しく腰を動かして絶頂させていく。
「ピカああ～～～、激しい、奥まで刺さってるピカ～～～!!!」
　スイレンの腰を掴んで激しく腰を振っていく。
「アサヤ、来て、来て、来てえ～～～！アサヤのタマゴ孕ませてピカ～～～!!!」
「うん、孕め、スイレン！」
　性器を奥に突き立ててスイレンの膣内に射精した。

「ピカ～～～、ピカチュウ～～～～～!!!」
スイレンはピカチュウの鳴き声を上げて絶頂した。
「ああ、ああ、出てる、アサヤの精液出てる、タマゴ孕んじゃう～～～～!!!」
体を震わせながらアサヤに抱き着いて射精を感じていた。射精が終わり性器を引き抜くと精液が溢れ出て来た。
「アサヤ、こんなに出して、大好き・・・」
スイレンはアサヤにキスをして微笑んだ。
「ねえ、スイレンって本当にピカチュウなの？」
エッチが終わり、スイレンは元の衣装を着た。水辺で座ってスイレンに聞いた。
「ええ、そうですよ。て言ったらどうします？」
「え、それは・・・」
「実は私、本当にピカチュウなんですよ・・・？」
スイレンがアサヤの耳元にそう囁いた。
「え？本当に・・・」
「と言うのは冗談です。でも、たまにはポケモンになりきってみるのもいいと思います・・・」
スイレンは悪戯心で舌を出して笑みを浮かべていた。可愛いけれど少し掴み処の無

い女の子だとアサヤは思った。

「さあ、アサヤ、マオ達の所へ戻りましょう」

スイレンが立ち上がってアサヤに手を伸ばした。アサヤはその手を握って一緒にマオとヒガナの元へと戻って行った。

# 第７話「オハナぼくじょう、お昼の休息」１

「アサヤ、オハナタウンだよ」

ピカチュウのたにで遊んだ後、アサヤ達はオハナタウンに付いた。西部劇を思わせる荒野の土地、アサヤも前世の記憶で覚えていたが、いざ足を踏んでみると荒野の住人になったような高ぶりを感じていた。

「オハナタウン、結構趣があるでしょ?」

マオが笑顔でアサヤにオハナタウンの風情を聞いた。

「うん、そうだね。映画の舞台になりそうな感じがするね」

「そうでしょう、あたしもオハナタウンの街並みって大好きなの」

「それに、この街には私達の友達がいるんですよね」

スイレンがマオに言うと彼女はニコリと頷いた。

「そうそう、まだ彼にアサヤの事を紹介していなかったよね。アサヤもきっと彼を好きになるよ」

（彼って、もしかして・・・）

前世の記憶でオハナタウンに住んでいるキャラと言えば彼しかいないとアサヤは考えた。

「マオ、その彼って誰かな？」

取り合えず、知らないふりをしてマオに聞いた。

「彼はね、燃えるダンサーと言った感じかな・・・」

「止めろお前達！」

すると泉の方から声が聞こえて来た。

「マオ、彼の声です！」

「何かあったみたい、助けに行くよ！」

マオ達は急いでその現場に向かって行った。

「お前達にロコンは指一本触れさせないぞ！」

褐色肌の半裸の炎をイメージした少年がブレイク団からロコンを守っていた。

「は、野生のポケモンを捕まえるのは自由だろう！」

「そうだよ、さっさとそこを退くんだよ！」

ブレイク団達はロコンを捕まえようとしていた。カキはアローラガラガラを使ってロコンを守っていた。

「カキ！」

マオの声が聞こえて来た。マオ達がカキを守るように駆け付けた。

「マオ、スイレン、来てくれたか！こいつ等がロコンを捕まえようとしているんだ。助けてやってくれ！」

「分かった。行くよスイレン！」

「はい！」

マオとスイレンはアマージョとオニシズクモを繰り出した。

「野郎、邪魔をするなら蹴散らしてやるぜ！」

ブレイク団はヤトウモリ、アローラベトベター、カリキリを出して襲い掛かって来た。

「はじけるほのおだ！」

ヤトウモリがはじけるほのおを飛ばしてアローラガラガラ達を攻撃した。

「アマージョ！」

ほのお攻撃を受けてアマージョは大ダメージを受けた。

「マオ、受け取れ！」

カキがキズグスリをマオに渡した。

「サンキュー、カキ！」

マオはキズグスリを受け取ってアマージョを回復させた。

「オニシズクモ、ねっとうです！」

スイレンの指示でオニシズクモはねっとうを飛ばしてヤトウモリを倒した。

「スイレン、やる！アマージョ！」

マオの指示でアマージョはトロピカルキックでカリキリを倒し、カキのアローラガラガラがシャドーボーンでアローラベトベターを倒した。

「凄い・・・」

三人のキャプテンの強さを見てアサヤは驚いていた。

「幼いけれど、相当な実力者だね。君も学ばないとね」

三人の戦いを見てヒガナもアサヤの頭を撫でながら彼等の戦いを見習うべきだと言った。

「畜生、ロコンを捕まえて儲けようと思ったのに、覚えてろよ！」

ブレイク団達は逃げ去っていった。

「さあ、もう大丈夫だ。安心して帰れ」

カキが言うとアローラロコンは感謝して帰っていった。

「カキ、あたし達の連携凄かったね」

「ああ、マオ達が来てくれたお陰でロコンを助ける事が出来た。ありがとう」

「礼はいいって。友達の友達は友達、助けるのは当然だもん」

マオは笑顔でカキに言った。

「マオは昔から友達思いだったな。うん？」

カキはアサヤの方に視線を向けた。

「マオ、その少年は？」

「この子はアサヤ、友達になったばかりなの。カキにも紹介しようと思ってね」

「アサヤです・・・」

アサヤがカキに挨拶した。

「マオ達の新しい友達か。俺はカキ、アローラに伝わる踊りを伝えているんだ。マオ、スイレンと友達になってくれてありがとう」

笑顔でアサヤにマオ達の友達になってくれた事を感謝した。

「カキ、アサヤとも友達になってくれると嬉しいな」

「マオ、マオの友達に悪い奴はいない。喜んで友達になろう」

アサヤと握手をして友達になった。

「それじゃあカキ、あたし達はオハナぼくじょうに行くから、また会おうね」

「ああ、またな。アサヤ、またこの街に来る事があったら俺が踊りを教えてやろう」

「うん、ありがとう、カキお兄ちゃん」

カキと別れてアサヤ達は牧場へと進んでいった。オハナタウンを出て枯れ草が生える土地を散策していく。そして牧場に辿り着いた。

「アローラ、牧場主さん！」

マオが元気よく牧場主に挨拶した。

「おお、キャプテンマオか、久しぶりだな」

牧場主もマオに元気よく挨拶した。

「今日もいいミルクが取れたんだ。貰っていくかい？」

「はい、ありがたく頂戴します」

ミルクを受け取るとアサヤ達に見せた。

「牧場主さんからミルクを貰ったよ！」

「これは味わい深い感じがしますね」

スイレンがミルクの濃厚さを見て驚いていた。

「ミルクはソースの材料にもなってマイルドさが増すんだよね。じゃあ、もうお昼になるし、このミルクを使った料理でも作ろうかな？」

マオがご飯を作ってくれる事にアサヤ達は喜んだ。

「いいねえ、草原で食べるお昼も中々味わいがあるよね」

「マオのご飯、楽しみです」

ヒガナとスイレンは食べたい気持ちが溢れていた。早速、草原の広場に言って鍋でカレーを作る事にした。

「ふんふんふん♪」

マオは鼻歌を立てながら鍋でカレーを似ていた。コクと味わいを出すためにミルクを入れて混ぜて行く。

「マオが料理を作っている間、私達は何をしましょうか？」

スイレンは時間をどう潰すかを考えていた。

「スイレンお姉ちゃん！」

するとそこへ子供達がやって来た。

「あら、どうしました？」

「ウソッキーが道を塞いでいるんだ」

「分かりました。少し懲らしめに行きますね」

「スイレン、僕は？」

「大丈夫です、一人で片付けられますから、アサヤは待っていて下さい、では」

スイレンは笑顔を見せて、その現場へと向かって行った。

「やれやれ、私達は暇だねえ」

「そうだね・・・」

「じゃあさ、ちょっと大人のお遊びでもしましょうか？」

ヒガナが艶やかな表情で微笑んでアサヤの顔を見ていた。

「あの、ヒガナお姉ちゃん・・・」

人気の無い草むらに来て、ヒガナがアサヤの性器を扱いていた。

「お昼まで時間はたっぷりあるよ。私が君を気持ちよくしてあげるね・・・」

アサヤの性器を握ったり離したりして扱いていく。指の腹で裏筋を撫でたり摩ったりしていき、尿道を押したりしてみる。

「あん、ああん、あん、あん・・・

ヒガナの手コキにアサヤは甘い声を上げて感じていた。指を円を描くように動かして尿道を擦り、玉袋を握っていく。

「んああ、ヒガナお姉ちゃんのスベスベの手と指で、あああ!ヒガナお姉ちゃんーーーー!!!」

アサヤは堪え切れなくなり射精して勢いよく精液を飛ばした。

「ふふ、沢山出したね、凄い量だよ・・・」

ヒガナは手に付いた精液を舐め取って妖艶に微笑んでいた。

「ヒガナお姉ちゃん・・・」

「ほうら、アサヤ、君の大好きな腋臭、味わうといいよ・・・♡」

ヒガナが腋を見せてアサヤを誘って来た。アサヤは近付いて腋を舐めていく。

「お姉ちゃんの腋、いい匂いがして、舐めたくなっちゃう・・・・」

「いいよ、私の腋、匂いを嗅いで、ペロペロしちゃいな・・・」

ヒガナは優しく微笑んでアサヤの腋舐めを受けていた。ヒガナが仰向けになるとアサヤは絶対領域の太腿にキスをして秘所を舐めていった。

「あ、あんん、うんん、君のクンニ、最高にいいね、気持ちいいよ、ああ、ああん、ああ

〜〜〜♡」

ヒガナは草を握ってクンニを受けていた。

# 第７話「オハナぼくじょう、お昼の休息」２

（ヒガナお姉ちゃん、僕のクンニで感じてるんだ・・・）

ヒガナの嬌声を聞いてアサヤは自分の攻めで気持ちよくなってくれているんだと微かな征服感を感じていた。

「ヒガナお姉ちゃんのおまんこ、舐める度にひくひく動いてる・・・これをもっと・・・」

「あ、あん・・・」

蠢いている肉を舐めていく。ヒガナは感じている顔をしてクンニを受けていた。

「はあ、あああ、気持ちいいね。君、凄いテクしてるよ・・・。ねえ、今度はなめ合いっこしてみよう・・・」

ヒガナの上に四つん這いになって秘所を舐めていく。ヒガナは垂れ下がっているアサヤの性器を咥えて舐めていった。男性上位のシックスナインを展開していく。

「う、うん、んん・・・」

「んん、ん、うん・・・」

アサヤは顔を秘所に近付けて舐めていき、ヒガナは亀頭を咥えて舐めていった。肉を舐め回し、片方は亀頭に舌を巻き付けて尿道を攻めていく。

（アサヤ、私のおまんこを凄い舐めてる・・・）

（ヒガナお姉ちゃんの舌の動き、凄く気持ちいいよお・・・）

二人共、互いに性器を舐め合って感じていた。

「ああ、お姉ちゃん、出る！」

「私も、ああん！」

口を離すとそれぞれの性器から精液と愛液がかかって顔を汚していった。

「はあ、君のクンニ気持ち良かったよ・・・」

「僕も、気持ち良かった・・・」

ヒガナが起き上がって微笑むとアサヤは照れた顔をしてヒガナに言った。

「二人共気持ちよくなれていいとこ尽くしだね・・・」

そう言ってアサヤの顔に付いた愛液を舐め取っていく。そして顔に付いているアサヤの精液を手で掬って舐めていった。

「君に舐められて私のおまんこ、凄いうずうずしてるんだ。だから・・・」

ヒガナが艶っぽい顔でアサヤを見つめている。

「ねえ、ここでまた私とエッチしちゃおう?」

ヒガナは仰向けになって足を開いて秘所を見せてアサヤを誘って来た。

「ほうら、いつもの、やっちゃおう・・・おいでよ♡」

両手を伸ばして少年を誘って来る。アサヤは息を呑んでヒガナの秘所に性器を当てた。

「ヒガナお姉ちゃんと、する・・・」

「ふふ、いいよ、入っておいで・・・」

亀頭を飲み込ませていき、一気に差し込んでいく。

「く、くうう、この固い感覚、見た目可愛いのに、凄い凶器があるね、君・・・」

入って来る少年の性器をヒガナは怪しく微笑んで見ていた。

「いいよ、君の好きなように動いてきて・・・」

少年の頬を撫でて動くよう誘った。アサヤは頷くと腰を動かしていった。

「ヒガナお姉ちゃん、お姉ちゃん！」

「ふふふ、凄い感じてるんだね。可愛い声して腰振って、最高だね」

ヒガナは微笑を浮かべてアサヤの攻めを受けていた。少年の必死さが伝わって快感に感じていく。

「よく出来てるよ。君の私への思い、凄く感じる、いい子いい子・・・」

少年の頭を優しく撫でながら攻めを受けていた。

「うん、く、くううん、君の動きが段々激しくなってきて、私・・・」

「ヒガナお姉ちゃん、感じてるんだ。僕の攻めで・・・・」

「うん、感じてるよ。このまま二人で気持ちよくなろうね・・・くうん！」

少年が更に腰を激しく動かしていく。ヒガナは草を握って快感を感じていた。

「お姉ちゃん、僕、もう、イク、イク！」

「いいよ、出しちゃいな・・・」

「ヒガナお姉ちゃん、ああ！」

絶頂を迎えてヒガナの膣内に精液を注ぎ込んでいく。

「あ、ああ、あああ・・・」

少年の流れ出る精液をヒガナは感じていた。

「はああ、君のが沢山溢れてるね。堪らないな・・・」

性器を引き抜くと射精した分の精が溢れ出ている。それを見てヒガナは満足そうにしていた。

「アサヤ、気持ち良かったよ・・・」

「僕も気持ち良かったよ・・・」

二人は見つめ合ってキスをした。

「お～い、アサヤ、ヒガナさん、お昼出来たよ、早くおいで～～！」

マオの呼ぶ声が聞こえて来た。

「お昼ご飯出来たみたいだね。お腹空いたし、行くとしましょうか？」

「うん、行く！」

「ご飯になると元気になるね。まあ、私もだけど。じゃあ行こうか」

身だしなみを整えるとヒガナと手を繋いでマオの元へと歩いていった。

# 第８話「せせらぎのおか、マオ達と遊ぶ」

オハナぼくじょうでお昼を食べた後、アサヤ達はせせらぎのおかで水遊びをする事になった。途中、トレーナーから釣り場を独り占めするブレイク団達がいたがヒガナのレックウザが悉く倒してしまった。

「さあさ、お引き取り願おうね」

穏やかな顔で威圧感を出して来るヒガナにブレイク団達は逃げ去っていった。

「ヒガナさん、凄い！」

「カッコいいです・・・」

ヒガナの強さにマオとスイレンは憧れの感情を抱いていた。そうしてブレイク団を懲らしめて奥の水場へと進んでいった。

「アサヤ、一緒に泳ごう！」

「楽しみましょう！」

滝の水が流れる奥の水場に来るとマオとスイレンが手を伸ばしてアサヤを誘った。マオは黒のマイクロビキニで、スイレンは白のスク水を着てアサヤを誘っていた。

「うん、行くよ！」

二人の美少女に誘われてアサヤは駆け寄った。

「アサヤ、せせらぎのおかの水は涼しくて気持ちいいよ」

「きっと貴方も好きになります」

「うん、早く泳ぎたいな」

「そう言えばヒガナさんは？」

マオが見るとヒガナがいない事に気付いた。水着に着替える準備をしているのだろうかと思った。

「おまたせ、さあ、泳ごうか？」

ヒガナがようやく駆け付けた。しかし水着は着ていない全裸だった。

「おや、どうしたんだい？」

「ヒガナさん、水着は着ないの？」

マオがヒガナに水着じゃないのかと聞いた。

「ふふ、分かってないなあ、男の子を誘うのと水で遊ぶなら裸が一番なんだよ」

「へえ、そうなんだ」

「マオ、それは恥ずかしいです」

マオがそう言う考えもあるのかと納得するとスイレンはそうじゃないだろうと否定した。

「ほら、私も来たんだし泳ごうよ」

ヒガナが水に入って泳ぎ、アサヤに手を伸ばして来た。アサヤは水に入り、泳いでヒガナを追い掛けた。

「ほらほらおいで、捕まえて御覧よ！」

「うん、捕まえるぞ！」

「あはは！」

アサヤとヒガナは仲良く泳いで追いかけっこをした。

「ヒガナさん、簡単にアサヤを釣ってしまいました・・・」

「待って、あたし達も混ぜてよ！」

スイレンとマオも泳いで二人を追い掛けた。その後、スイレンから泳ぎの仕方を教わったりマオと一緒に泳いだりして楽しんでいった。

「皆、凄い楽しかった」

「喜んでくれてよかったよ」

アサヤが礼を言うとマオは笑顔で少年が喜んでくれた事に感謝した。

「アサヤ、イアのみ、どうぞ」

マオがアサヤにイアのみを差し出した。

「甘くて疲れが取れるよ。食べて」

「うん」

アサヤがきのみを手に取って食べようとした。

「ちょっといい？」

するとヒガナが木の実を持っている手を掴んで待ったをかけた。

「ヒガナお姉ちゃん？」

「どうせならもっと刺激的な食べ方がいいよね・・・」

ヒガナは頬を赤くして艶っぽい顔でアサヤを見ていた。そしてイアのみを手に取るとそれを咥えてアサヤの顔に近付けた。アサヤはその意味を察してヒガナが咥えているイアのみを噛んで食べていった。

「ふふ・・・」

ヒガナも実を食べ進めていって顔をくっ付けて行く。ポッキーゲームのような感じに食べ進めていき、そしてキスをして舌を絡めていった。

「うわあ、ヒガナさん、大胆・・・」

「凄いドキドキします・・・」

ヒガナの大胆な行動にマオとスイレンはドキドキして見ていた。アサヤはチラチラ見て二人が驚いてるのを確認していた。しかしすぐに視線をヒガナに向けて舌をｋ羅メルディープキスをしていった。

「んちゅ、ちゅ、ちゅ、もっと私の舌を絡めて・・・」

ヒガナの口の中で舌を動かし、舌を巻き付け合ったり上顎をつついたり、歯茎や下の裏側を舐めていった。ヒガナを押し倒し、胸に顔を埋めて乳首を吸っていった。

「ふふ、夢中におっぱい吸っちゃってるね、いい子いい子・・・」

ヒガナはアサヤの頭を優しく撫でてあやしていた。

「あん、おまんこに固いのが当たって、ん・・・!」

ヒガナが見るとアサヤが性器を自分の秘所に擦っていたのが分かった。

「うふふ、入れたい?私のおまんこに?」

「うん、入れたい・・・」

「いいよ、入って来て、二人に私達が愛し合ってるのを、見せてあげよう?」

アサヤはヒガナの秘所に性器を入れて腰を動かしていった。

「あ、あ、は、はあん、おまんこの膣内で君のが激しく動いて、凄く気持ちいい・・・!」

「お姉ちゃん、ヒガナお姉ちゃん!」

「うふふ、可愛い声しちゃって、いいよ、もっと動いて気持ちよくなろう・・・」

ヒガナが優しく抱き締めて自分の胸の匂いを嗅がせていく。アサヤはヒガナの肌の匂いを感じながら腰を動かしていった。少年の性器が激しく動いている為、ヒガナの膣内に海綿体が擦れて行くような感覚がしていた。

「ああ、あん、あん、もうダメ、私イっちゃう、イク・・・!」

少年の激しい攻めにヒガナも絶頂を迎え始めていた。

「ヒガナお姉ちゃん行くよ！」

「あ、あ、あ、ああ～～～!!!」

ヒガナは激しく絶頂した。少年はヒガナの秘所に精液を注ぎ込んでいく。そして引き抜くとヒガナはぐったりと倒れ込んだ。

「ああ、君の精液、ああ～～ん・・・・」

ヒガナは身悶えして体を震わせながら余韻に浸っていた。アサヤが呆然としているとマオとスイレンが互いの秘所をアサヤに向けて誘っていた。

「アサヤ、私達にもお願いします」

「あたし達も気持ちよくしてえ・・・♡」

スイレンが上、マオが下と言う体位でお尻を振りながらアサヤを誘っていた。アサヤはスイレンのから入れて腰を動かした。

「ああ～～ん、アサヤのおちんちんが私に来ました～～!!」

「わあ、スイレン、凄い感じてる！」

スイレンの感じている顔を見てマオはドキドキしていた。スイレンに顔を近付けてレズキスをしていく。アサヤはお尻を強く掴んで腰を動かし、スイレンを打ち付けていった。

「ああ、ああ～～ん、おちんちんがずんずん突いて来ます～～～!!!」

「スイレンの可愛い顔、もっと見せて・・・！」

スイレンはアサヤの攻めを、そしてマオによる愛撫を受けていた。アサヤはスイレン

の秘所から性器を抜いてマオに入れた。

「ああ～～ん、今度はあたしに、ああん！」

マオの膣内を激しく突いて感じさせていく。

「あ、あ、あん、あん、アサヤの、素敵、素敵だよお・・・♡」

「マオも可愛いです・・・」

「きゃああ、おっぱいダメえ～～～！」

スイレンがマオの乳首を吸って来た。マオはアサヤの攻めとスイレンの乳首舐めの両方を受けて快感を感じていた。アサヤは交互に二人の膣内を突いていき、射精していった。

「「きゃああ～～～♡」」

二人は激しく絶頂して倒れ込んだ。

「はあ、アサヤにこんなに出して貰えて、幸せだよお・・・」

「アサヤ、大好きです・・・」

マオとスイレンは這うように動いてアサヤにくっ付いた。マオは首筋を舐めて、スイレンはアサヤの乳首にキスをして舐めていく。気が付けばヒガナもアサヤのまだ固いままの性器を舐めてフェラチオをしていた。

「アサヤ、まだ時間はあるんだから、たっぷり楽しもうね・・・」

ヒガナはそう言って笑みを浮かべてフェラチオを続けていった。アサヤと三人の女の子達の交わりはまだ続くのだった。

# 第9話「転生して初めてのバトルロイヤル」1

せせらぎのおかでマオ達と水浴びを楽しんだ後、アサヤ達はロイヤルアベニューに到着した。

「着いたよアサヤ、ロイヤルアベニューに！」

マオが両手を広げて街を紹介した。

「ロイヤルアベニューって言うのはね、バトルロイヤルを行うドームがある街なの！」

「バトルロイヤルと言うのは、四人でポケモンバトルをするのですよ」

マオとスイレンがアサヤにバトルロイヤルに付いてを説明した。アサヤも前世の記憶でバトルロイヤルに付いては多少は知っていたが、ここでは初めて聞く感じで二人の話を聞いていた。

「四人でバトルして勝敗を競う感じ？」

「そんな感じだね。アサヤ、良かったら挑戦してみる？」

マオがバトルロイヤルに参加しないかと聞いて来た。

「え、でもすぐに参加出来るのかな？」

「大丈夫です、バトルロイヤルは誰でも歓迎ですから、行きましょう」

スイレンが手を握ってドームへと連れて行こうとした。

「あれ、ヒガナさん？」

マオが見るとヒガナは別の方向へ行こうとしていた。

「ヒガナさんは行かないの？」

「私は結構、お祭り騒ぎには興味ないんでね」

「ええ、行こうよ、楽しいよ」

マオが誘ってもヒガナは薄く笑って首を横に振った。

「誰かとわいわいするのは私の性に合わないの。と言う訳で君達が楽しんでいる間、ぶらりさせてもらうよ」

そう言って公園へと向かって行った。

「ヒガナさん、誰かと仲良くするのは嫌いなのかな？」

「寧ろ一人でいるのが好きかもしれませんね。群れるのを好まない、誰とも馴れ合わない孤高の女性って感じがします」

「確かに、孤高の風来坊ってイメージだもんね。そこに痺れるよね」

「はい、憧れます」

普通なら素っ気ない奴といいイメージを持たれない感じだが、アローラ人の気質なのだろうか、馴れ合いを好まない、群れない姿勢をポジティブに考えて好意的に捉えていた。

「じゃあ、アサヤ、ロイヤルドームに行ってみよう」

マオとスイレンに手を繋がれてアサヤはロイヤルドームに入っていった。

「よう、マオ、スイレン、ロイヤルドームにようこそ！」

入ってすぐに腹面を付けたレスラーが元気よく声を掛けた。

「あ、ロイヤルマスクだ！」

マオが言うそのレスラーはロイヤルマスクだった。アサヤは前世の記憶でククイ博士だと見抜いていたが言わない事にした。

「君達、バトルロイヤルに挑戦に来たのかい？」

「ううん、この子に挑戦させてみようと思って」

「初めまして、僕はロイヤルマスクだ。君の名前は？」

「アサヤです」

「アサヤ、良かったら僕がバトルロイヤルに付いて教えてあげよう。準備はいいかい？」

「ええと、すぐに出来るんですか？」

「ああ、ポケモンがあればいつでも大歓迎さ！」

「アサヤ、バトルロイヤル、やってみなよ！」

「私達も応援しますから」

「うん、じゃあ、やってみるよ」

マオとスイレンの後押しを受けてアサヤは挑戦する事にした。

「よし、君も参加が決定となったが、後二人いるな」

残りのメンバーをどうするかロイヤルマスクが考えた。

「久しぶりだな、ロイヤルマスク！」

だが考える必要は無かった。同じく腹面を付けたレスラーがロイヤルマスクに声を

掛けた。

「おお、君はマキシマム仮面！アローラに来ていたのかい？」

「おう、お前との再戦を願って、今アローラに来たぞ！」

「師匠だけじゃないぜ、俺もいるぞ！」

更にマキシマム仮面、マキシを師匠と慕うジュンも現れた。

「おいおい、弟子にした訳じゃないが、俺とこいつも参加でいいか？」

「ああ、君達なら大歓迎だ。さあ、バトルロイヤルを始めよう！」

メンバーが決まってステージに着いた。戦うのはアサヤ、ロイヤルマスク、マキシ、ジュンの四人である。それぞれ、ボクレー、ガオガエン、フローゼル、ポッチャマを出して試合開始を待っていた。観客席でもマオとスイレンがアサヤを応援していた。

試合開始のゴングが鳴った。先に動いたのはロイヤルマスクのガオガエンだった。ぶんまわすをしてフローゼル達三体を攻撃した。

「やったな、バブルこうせんだ！」

ジュンの指示でポッチャマがバブルこうせんを飛ばしてガオガエンを攻撃した。

「いい攻撃だぜ！」

ロイヤルマスクの指示でガオガエンはローキックをしてポッチャマを攻撃、れいとうパンチに出たフローゼルの攻撃をかわすとＤＤラリアットをして攻撃した。

「ロイヤルマスクも師匠も凄いぜ。俺も負けてられないぞ！」

ジュンのポッチャマがつつくでボクレーに攻撃して来た。ボクレーはこれを避けるとえだづきをしてポッチャマを攻撃、続いてウッドハンマーでフローゼルを攻撃した。

「行くぜガオガエン、ファイトだ！」

ガオガエンがぶんまわすをして全体攻撃をした。ポッチャマとボクレーは力尽きてしまった。

「師匠よりも先に敗けた！」

「強い！」

ロイヤルマスクの圧倒的強さにアサヤは驚いていた。バトルはロイヤルマスクとフローゼルの一騎打ちとなった。

「フローゼル、たきのぼりだ！」

フローゼルがたきのぼりをして攻撃した。

「ガオガエン、カウンターだ！」

ガオガエンはカウンターをしてフローゼルを攻撃、ＤＤラリアットを振るってフローゼルを倒した。

『勝者、ロイヤルマスク！』

「やったぜ！」

勝ったのはロイヤルマスク。彼の勝利でバトルロイヤルは幕を下ろした。

「ロイヤルマスク、今回は俺様の負けだ。けど、もっと更に強くなってお前にリベンジするからな！」

マキシは笑顔でハッスルしてロイヤルマスクに再戦を誓った。

「ああ、僕も受けて立つよ！」

「それじゃあ、また会おうな！」

「その時には俺も強くなってるからな！」

マキシとジュンが去った後、ロイヤルマスクはアサヤを励ました。

「初めてのバトルロイヤル、敗けたけれどいい刺激にはなっただろう？」

「はい、敗けたけどいい経験になりました」

「そう、敗けた悔しさが君をもっと強くしてくれる。君のこれからの成長を楽しみにしているぜ！」

自分を激励するロイヤルマスクの姿が印象に残ったアサヤだった。

「アサヤ、お疲れ様、はい」

ドームを出た後、公園のベンチに座った。マオがおいしいみずを差し出してそれを受け取った。

「アサヤ、残念だったね」

「もう少しでしたね」

「うん、最初だから仕方ないよ。でも今度は勝ってみたいな」

「そうだよね、これでへこたれる訳にはいかないもんね。その意気だよ」

マオがガッツポーズを取ってアサヤを励ました。

「でも、落ち込んだ気分を引きずるのは良くないですよね？」

「え、ああ・・・」

スイレンがアサヤの性器を握って来た。それを見てマオもアサヤの首筋を舐めて来た。

「そうそう、いじけタイムが続いちゃ旅にも悪いもんね。だから・・・あたしが」

「私が・・・」

「「君を、貴方を癒してあげます・・・」」

マオがズボンのチャックを開けて固く勃起した性器を舐めて、マオが服の中に手を入れて乳首をいじって来た。

「アサヤ、君が頑張ってるのはあたしもスイレンも良く分かっているよ・・・」

「そうです、アサヤはよく頑張りました。だから、私達が頑張り賞を上げちゃいます・・」

スイレンはアサヤの性器をフェラチオして舐めながら玉袋を指でつついたりなぞったりしていった。マオは乳首を摘まんだり指先でつついたり転がしたりしていった。

「あああ、ああん、あん、いや、あん、マオとスイレンに攻められるの、気持ちいいよお・・・♡」

アサヤは感じた顔をして二人の愛撫を受けていた。

「可愛い声、もっと聞かせて、アサヤ・・・♡」

「アサヤが感じてくれると私達も嬉しいですから・・・」

アサヤの感じている声を聞きながらマオとスイレンは愛撫をしていた。

# 第9話「転生して初めてのバトルロイヤル」2

スイレンは口をすぼめてアサヤの性器を吸っている。玉袋を指でつついたり指の腹で撫でたりしていきながら性器を根元まで舐めている。

マオも指で乳首を摘まんで強く抓ったり、指で先端を転がしたりしていく。そしてへそに指を入れてぐにぐにと押したり撫でたりして刺激を与えて行った。

「あああ、うあああ、マオとスイレンの手と口で、僕もうイク、イっちゃう!出る、出ちゃう、精液出ちゃうから、離してえ!」

アサヤは体を震わせて懇願していたが二人は構わず性器を、乳首をいじっていった。

「アサヤ、我慢出来ないんでしょう?いいよ、そのままイっちゃえ・・・」

「私達で感じちゃって下さい・・・!」

「ああ～～～ん、ダメえ～～～～!!!」

アサヤは限界になって精液をスイレンの口内に流していった。

「う、ううん!!!」

スイレンは苦しそうにしながらもアサヤの精液を口に含んでいった。

「アサヤ、出しちゃったね・・・」

マオはスイレンの方に近付いてキスをした。スイレンもマオに口移しをして精液をマオの口の中に流していった。

「アサヤの精液、コクがあって美味しい・・・」

「ええ、独特の苦味と甘味が混ざって美味しいですね・・・」

マオとスイレンはアサヤに微笑むとホットパンツとズボンを脱いで秘所を晒すとベンチに手を付いてアサヤにお尻を向けた。

「アサヤ、最後までしちゃおう♡」

「私とマオのおまんこに貴方のおちんちんを入れて下さい・・・♡」

可愛い二人の美少女がお尻をフリフリ揺らしてアサヤを誘っている。アサヤは息を呑んでマオのお尻を掴んで性器をお尻に擦っていった。

「アサヤ、あたしからしてくれる?」

「うん、マオから入れる・・・」

「うふふ、お尻を凄い擦ってる、いいよ、入って来て・・・♡」

マオの膣内に性器を入れて腰を動かした。

「ああん、アサヤのおちんちんが入って来たよ。お友達のおちんちんが奥まで刺さって来てる～～～♡」

性器が奥まで来ている感覚にマオは神経が麻痺するような感覚に襲われていた。アサヤは腰を振ってマオの膣内を突いていく。

「んああ、これ堪らない、おまんこを抉られるの気持ちいい、いい、いい、気持ちいい、き、も、ち、い、い～～～♡」

マオは頬を赤くして快楽に満ちた笑顔になりながら少年の攻めを受けていた。

「マオ、こんなに感じて、ああ、私も早く欲しい・・・」

スイレンは手で秘所をいじって自慰をしながら待っている。

「マオ、イクよ、マオ、ああ！」

「ああ、おお、おん、出てる、アサヤの精液！」

マオの膣内に精液を流し込んでいった。マオは顔を上げてアヘ顔になって感じていた。性器を引き抜くとスイレンの秘所に当てた。

「アサヤ、来てえ・・・待ち焦がれてたのお・・・♡」

「うん、スイレンも気持ちよくさせる・・・！」

「ああ～～ん、来ました。アサヤのおちんちん！」

スイレンの秘所にも入れて腰を振っていく。スイレンの胸を触って揉んでいきながら腰を動かし膣内を擦っていく。

「あ、あ、はあ、あん、アサヤの激しく突いて来てる、お腹抉られそうで怖い、でも、こ

の感覚も好き・・・♡」

スイレンは舌を出して快楽に溺れていた。アサヤは何度も突いていき、スイレンの背中にもたれかかった。

「スイレン、スイレン、スイレンのおまんこも好きだよ」

「私も貴方を、ああ、イク、イキます！」

「スイレン、ああ～～～!!!」

「ああ～～～ん!!!」

スイレンの膣内に精液を流していった。スイレンは痙攣してアサヤの精液を受け止めていった。

「はああ、アサヤのがこんなに、アサヤ、好きですよ♡」

スイレンはアサヤに抱き着いてキスをした。

「おやおや、こんな所で和気あいあいと・・・」

そこへヒガナが戻って来た。

「ヒガナお姉ちゃん・・・」

「二人だけいい思いをしてるのはずるいよね。だから、私も混ぜて♡」

ヒガナが少年の背中に抱き着いて来た。スイレンがアサヤにキスをして、マオがフェラチオをしている。三人の女の子とのエッチをアサヤは楽しむのだった。

# 第１０話「ヴェラかざんこうえんの模擬試練」１

バトルロイヤルを楽しんだ後、アサヤ達はトンネルを抜けて海沿いの道路を歩いていた。

「もうすぐでヴェラかざんこうえんだね」

「そうですね、カキがいるかもしれませんね」

マオとスイレンがスーパーメガやすで買った食材の入ったビニール袋を持って火山の事を話していた。アサヤはヒガナと一緒にその後ろを歩いていた。前世の記憶では火山でカキの試練が行われる事を覚えていた。

「カキ、何してるんだろうね」

「彼の事ですからガラガラ達と踊っているかもしれませんね」

「そうだね、いつも熱心に踊りをやっているからね。試練をする場所で踊ってるかも」

女の子同士と言うだけあってわいわいと賑やかに話をしていた。

「女の子ってお喋りするのが好きだよね」

ヒガナがアサヤの肩に寄り掛かって女の子はお話し好きだと言った。

「そうだね・・・ヒガナお姉ちゃんは？」

「私は誰とも仲良くなる気はないから、そんなでもないかな。まあ、君は特別だけどね」

そう言ってアサヤの頬をつついてはにかんだ。

「マオ、スイレン、袋持ってあげようか？」

アサヤがマオとスイレンが持っているビニール袋を代わりに持とうかと聞いた。

「気遣ってくれてありがとう。でも大丈夫だよ」

「そのお気持ちだけでも充分ですから」

マオとスイレンは気持ちだけ受け取って自分達で持つと言った。

「そうだ、アサヤ。火山に行ってみない？」

「火山？」

「うん、カキがいると思うし、挨拶でね」

「じゃあ、行こうかな？」

「うん、行こう行こう」

マオがはしゃいで行く事にした。

「ヒガナさんもどう？」

「私はパス、挨拶するだけでしょ。待ってるよ」

「ええ、そう言わずに一緒に行こうよ。美味しいお昼だって食べたいし、ね、お願いお願い」

マオが瞳をキラキラさせて誘って来る。ヒガナは頭を掻いて溜め息を吐いた。

「やれやれ、お節介さんなんだからさ。分かりました、着いて行きますよ」

ヒガナが付いて行くと言うとマオは笑顔になって喜んだ。そうして歩いている内に火山に辿り着いた。

「ほら、アサヤ、見えるでしょう。大きな火山が、これがヴェラかざんこうえんなの」

マオが天辺にそびえる山に指を差してアサヤに火山公園であると説明した。前世のゲーム内では分からなかったがこうしてみるとかなりの迫力があった。

「結構大きな山なんだね」

「でしょう、この火山公園で試練が行われるの」

マオが言うとアサヤは前世の記憶でカキの試練が行われる所だと思い出した。

「カキが待ってるから早く登ろう」

マオが先走りして手を振ってアサヤ達を誘った。アサヤ達もマオを追い掛けて火山を登っていった。ヴェラかざんこうえんは思っていたよりも高く登っていくのも一苦労だった。

「アサヤ、休憩してお昼にしようか」

半分登った所で昼食を取った。メガやすで買ったお弁当に舌鼓を打った後、再び歩いて上を目指していく。

そうして登っていき、遂に頂上に辿り着いた。

「あ、カキだ。やっぱり踊ってる」

試練の広場に来るとマオ達が思った通りカキがアローラガラガラ達と踊っていた。

「アローラ、カキ!」

マオとスイレンがカキにアローラの挨拶をした。

「おお、マオ、スイレン!」

二人に気付いてカキも挨拶をした。

「カキ、今日の調子はどう？」

マオがカキに踊りはバッチリかと聞いた。

「そうだな、今、新しい試練をイメージしていた所なんだ」

「試練？」

「ああ、試練をするにあたってマンネリ化してはいけないからな。新しく模索していた所なんだ」

「へえ、それってどんなの？」

「そうだな・・・」

カキが考えているとアサヤと目が合った。

「アサヤ、お前もいたんだな」

「うん、いるよ」

「お前を試してみようかな・・・・」

「試す?」

「簡単だ、俺の考えた試練を受けて欲しい。本番ではない、模擬試練だ。それでお前がどんな反応を取るか見てみたい。受けてくれるだろうか?」

「うん、やってみようかな」

「アサヤ、いい返事だよ。試練を好きになってくれたらあたしも嬉しいから」

「新しい刺激に挑戦、悪くないですよ」

アサヤが挑戦すると聞いてマオとスイレンが後押しした。

「カキ、受けてみるよ」

「そう言ってくれるか。嬉しいぞ、では、模擬試練を始めるぞ」

早速模擬試練が始まった。マオとスイレン、ヒガナはアサヤの挑戦を見守った。ガラガラ達が踊って動きが止まった。

「今のポーズを覚えていてくれ」

そして再び踊りが始まった。そしてポーズを取る。

「さてアサヤ、今のとどこか違うだろうか？」

ガラガラ達が最後のポーズを取った所でカキが最初と最後でどこが違うかアサヤに求めた。

「真ん中のガラガラの上にカラカラが乗ってる」

アサヤは最後ので真ん中のガラガラの頭にカラカラが骨を頭に乗せて立っている事を言った。

「正解だ、簡単だったようだな、では次！」

二度目の試練が始まった。次も間違い探しだった。ここではやまおとことだいすきクラブの乱入があって何とか勝利した。そして最後・・・、

「始め！」

ガラガラ達の踊りが始まる。最初はいつも通りの感じだったが二度目は・・・、

「！」

アサヤは驚いた。マオ達もびっくりしている。ガラガラ達の前で両手を広げてすかした顔をしている切れ長の目をした浴衣姿の男性が立っていたからだ。

「さあ、アサヤ、先程と違いがあるだろうか」

「ギーマさんだよね？」

その男性がギーマである事をアサヤは前世の記憶で知っていた。

「何と、お見事です、正解ですから、おいでませ、ギーマさん！」

「アローラ、少年」

ギーマが涼しい声でアサヤに挨拶した。

「彼の試練、中々面白いだろう。私もこうして混ぜてもらってね。さて、模擬試練、ぬしポケモンの代わりに、私が君の相手となってやろう！」

ギーマはアサヤに勝負を挑んで来た。

「模擬試練最後の内容はギーマさんと戦う事だ！」

カキが言うとギーマはボールを投げてレパルダスを繰り出して来た。

「このレパルダスに勝てたら模擬試練達成だ。さあ、挑んで来るがいい」

「アサヤ、頑張れ！」

「応援してます！」

マオとスイレンがアサヤを応援していた。アサヤは意を決してボクレーを出した。

「じゃあ、始めるとしようか」

ギーマが指を鳴らすとレパルダスがつばめがえしに出た。ボクレーはこれをかわしてえだづきに出たが、レパルダスはかわしてしまい、つじぎりで攻撃した。

「ボクレー・・・！」

ボクレーが力尽きてしまった。アサヤは次にゴースを出した。ゴースはシャドーボールを連射したがレパルダスはこれをかわしながら前進してつじぎりで攻撃、ゴースを倒してしまった。

「おやおや、君の力はこんなものかい？」

「まだまだ、メタモン！」

三度目の正直としてメタモンを出した。メタモンはへんしんしてレパルダスになり、ギーマのレパルダスと睨み合った。

# 第１０話「ヴェラかざんこうえんの模擬試練」２

「メタモン、つじぎり！」

「レパルダス、こちらもつじぎりだ！」

メタモンとレパルダスがつじぎりをしてぶつかり合う。メタモンが切り裂くに出ると、レパルダスはこれを避けて、つばめがえしをして攻撃した。

「さあ、行くぞ！」

レパルダスが素早く動いて迫って来る。

「メタモン、すなかけ！」

アサヤの指示でメタモンがすなかけをしてレパルダスを怯ませた。

「みだれひっかき！」

みだれひっかきをして追撃するときりさくでレパルダスを攻撃、これを見事に倒したのだった。

「やれやれ、新米トレーナーに敗れてしまうとは・・・」

「やった！」

アサヤの勝利にマオ達が喜んだ。

「アサヤ、試練に付き合ってくれてありがとう。記念としてこれを受け取ってくれ」

カキはアサヤの勝利を称えて参加した記念としてのろいのおふだをプレゼントした。

「君のこれからの人生に幸ある事を祈っているよ」

ギーマもアサヤを祝福して模擬試練は幕を閉じた。

「アサヤ、模擬試練、お疲れ様・・・ちゅ♡」

ヴェラかざんこうえんを出てモーテルで夜を明かす事にした。マオとスイレンはご褒美とばかりにアサヤにキスをした。

「マオ、スイレン・・・凄いキスして来る」

「アサヤは頑張ってたからね。そのご褒美をあげようと思うの」

「私達が、今夜のお供をしてあげます」

そう言うと、マオとスイレンがアサヤの乳首を舐めて来た。

「あ、あ、あ、二人が僕の乳首を・・・！」

マオは舌で乳首を転がすように舐めていき、スイレンは乳首を吸って引っ張ったりしていた。

「きゃああ、おちんちんしこしこダメぇ!」

マオとスイレンがアサヤの性器を握ったり扱いたりして来た。乳首舐めをされながらの手コキにアサヤは首を振って感じていた。

「ふふ、君の可愛い顔を見てたら私も・・・」

ヒガナも近付いてアサヤにキスをして舌を絡めて来た。三人の女の子に攻められてアサヤは体を震わせて感じていた。

「うううう、うんん!」

口をヒガナのキスで塞がれてうめき声を上げている。そして限界を迎えて射精した。

「アサヤの精液、こんなに沢山・・・」

「手にべっとり付いてます・・・」

マオとスイレンはアサヤの精液を舐め取っていく。そしてマオが上、スイレンが下になって秘所を向けてアサヤを誘って来た。

「アサヤ、あたし達のおまんこに入って来て・・・」

「私達の準備は出来てますから・・・」

二人の美少女が誘って来る。アサヤはマオの膣内に性器を入れて腰を動かしていった。

「ああ、あん、あん、気持ちいい、やっぱりアサヤのおちんちん凄くいいよ!」

マオはシーツを握ってアサヤの攻めを感じていた。スイレンがマオにレズキスをして舌を絡めていく。女の子同士のキスを見て興奮してマオの膣内を激しく突いていく。

「んひゃああ、おおお、アサヤがもっと激しく攻めて来てるの！ああ、これ堪らない、ああ！」

「ああん、今度は私のおまんこに！」

マオの膣内から性器を引き抜いてスイレンの秘所に挿入した。スイレンの膣内を激しく擦って荒らしていく。スイレンはぐったりしたマオの体を抱いてアサヤの突きを感じていた。マオの滑るのある膣、スイレンの締め付けのある膣を交互に味わって射精した。

「ああ～～～ん♡」

アサヤの射精を受けてマオとスイレンは絶頂の声を上げた。エッチを終えると二人は抱き合ってぐったりと倒れ込んだ。

「う！」

アサヤが余韻に浸っているとヒガナが後ろから尻穴に指を入れて来た。指をくねらせるように動かして首筋を舐めていく。

「まだまだ頑張れるよね。私もいるんだから・・・！」

「あ、あああ！」

ヒガナの指コキでアサヤは射精してしまった。

「お尻に指を入れられただけでどぴゅどぴゅしちゃうなんて、エッチ君♡」

ヒガナは仰向けになって足を開きアサヤを誘った。

「さあ、入っておいで・・・♡」

ヒガナの太腿を掴んで性器を秘所に当てて擦っていく。そして飲み込ませていった。

「あああ、んああ、おお、おまんこに君のが、んいい！」

ヒガナがシーツを握って舌を伸ばして感じている。アサヤは腰を激しく動かして突いていった。

「うあああ、ああん、おまんこの膣内で君のおちんちんが暴れて、可愛い顔してここは凶悪〜〜〜♡くひい、いい、いいう！」

ヒガナに抱き着いて匂いを嗅いで何度も突いていく。ヒガナも少年の背中に両手を回してキスをしながら感じていく。

「アサヤ、他人に興味は無いけど、君は別だよ、君の事、こうして可愛がってあげるからね♡」

「うん、ヒガナお姉ちゃん！あああ！」

「ああ、おお、おおう、ああう！おまんこに精液流れて・・・！」

ヒガナの膣内に射精していき、絶頂を迎えた。二人はぐったりと倒れて息を吐いた。

「はあ、はあ、気持ち良かったよ、君とのエッチ、堪らなく好き・・・」

「うん、僕も・・・」

「明日はどんな出来事が待っているんだろうね・・・」

明日はどんな事をしようかなとアサヤは考えながらヒガナ達と一緒に眠りに就いた。しかし、その時、ハノハノリゾートで異変が起こっている事をアサヤ達は知らないでいた。

# 第１１話（最終回）「レインボーロケット団出現、新たな冒険の始まり」１

アーカラじまに朝がやって来た。モーテルではアサヤがベッドで寝息を立てている。

「うん？」

室内からいい匂いがして来た。目を覚まして体を起こすと、マオが料理を作っていた。

「アローラ、アサヤ。今、朝ご飯を作ってたの。もうすぐ出来るから待ってて」

しばらく待って料理が完成した。リンドサラダにマトマパスタと言った野菜やきのみをふんだんに使った料理が並んだ。

「さあ、召し上がれ」

マオがパスタを絡めてアサヤに食べさせた。スイレン達も食事を楽しんでいる。パスタをすすって味を楽しんだ。

「うん、美味しいね」

「うふふ、喜んでもらえて良かった」

少年が味を気に入ってマオは喜んだ。

「アサヤ、こうしてアーカラじまを旅してみてどうだった？」

「楽しいよ。マオや皆と一緒に旅して」

「そうでしょう、旅っていいよね。特にアローラではしまめぐりって言う旅があるの。各地の島を巡ってしまキングやクイーンに勝ってリーグを目指すの」

前世の記憶でポケモンリーグが作られた事を思い出した。この世界はリーグが建てられた後の世界線なのだと察した。

「アサヤ、しまめぐり、挑戦してみない？」

「しまめぐり？」

マオがしまめぐりをしてみないかとアサヤに聞いた。

「しまめぐりは楽しいですよ。色んな人達に出会えて、美味しいお店や面白い施設もありますし、きっと好きになりますよ」

スイレンもアサヤにしまめぐりを勧めて来た。

「アサヤ、しちゃおうよ、しまめぐり」

「う～～ん・・・」

マオ達に勧められてアサヤは考えた。この世界に転生して考えた事も無かった。マオ達と旅が出来ればいいと思っていたが、しまめぐりを勧められてアサヤはどうすれか考えた。

「マオ、スイレン、アサヤ、いるか?!」

そう考えていたその時、カキがドアを開けて入って来た。

「カキ、そんなに慌ててどうしたの?」

マオはカキが急いでドアを開けた事に驚いていた。

「大変だ、ハノハノリゾートを不思議な光が包んで、建物が異様な光景に・・・!」

「カヒリさん・・・!」

ハノハノリゾートで大変な事が起こっている事をアサヤは感じた。そしてカヒリの事が心配になった。

「リゾートがどうしたの?!」

「大変な事が起こっているのは確かなようですね・・・」

「兎に角、俺と一緒に来てくれ！」

カキに言われてアサヤ達はハノハノリゾートに急いだ。

「うわあ、ハノハノリゾートが真っ黒に・・・」

リゾートに着てマオは驚いていた。ハノハノリゾートが黒く染まっている外観に変わっていたからだ、真ん中にＲのマークが付いている。

「そう言えば、前にエーテルパラダイスでも同じような事が起こりましたね」

「うん、もしかしたらまた・・・」

スイレンが過去に起こった事件を言うとマオもそうかもしれないと頷いた。

「お～い、君達!」

「お、博士!」

ヒガナが振り返るとククイ博士が手を振って駆け付けた。しまクイーンのライチも駆け付けていた。

「あんた達、大変な事になったね」

「ライチさん、リゾート、どうなってるのかな?」

「さあね、けど、とんでもない事が起こったのは確かだね」

「ライチさん、僕達で何が起こったか、見てみよう！」

「博士、あたし達も一緒に戦うよ！」

ククイ博士とライチが行こうとするとマオ達も戦うと言った。

「君達も戦ってくれるのか、心強いぜ、一緒に戦おう！」

「やれやれ、面倒事はごめんだけど、今はそんな事言ってる場合じゃないね」

ヒガナもやる気を出してククイ博士達と一緒にリゾートに入っていった。

「侵入者だな、サカキ様の邪魔はさせないぞ！」

建物内にはロケット団がいて、ポケモン達を出して襲い掛かって来た。

「やっぱりロケット団だったか、ライチさん、力を合わせよう！」

「ああ、頼りにしてるよ！」

ククイ博士とライチが昼と夜のルガルガンを繰り出して戦った。ヒガナもレックウザを出して蹴散らしていく。

「お子様達は私達が相手になるわ！」

更にしたっぱ達が現れてアサヤ達に襲い掛かった。

「子供だからって甘く見ないで！」

「俺達の本気を見せてやるぞ！」

マオとカキがアマージョとアローラガラガラを出して戦いに挑んだ。二人の連携でしたっぱのポケモンを倒していく。

「お子様ってこんなに強いの・・・？」

「サカキ様、申し訳ありません・・・」

マオとカキに敗れてしたっぱ達は退却した。

「マオ、カキ、流石です」

「ありがとう、スイレン。博士達も」

ククイ博士達もロケット団のしたっぱを見事に倒していた。

「君達、キズぐすりを分けてあげよう」

博士がキズぐすりを与えて回復させた。そうして前進していき、したっぱ達を倒しながら進んでいった。

「ほう、ここまで辿り着いたか」

最上階に到着するとボスであるサカキが立っていた。

「ロケット団、僕達がいる限り、君達の好きにはさせないぜ！」

「再びこのアローラにやって来たが、計画に邪魔はつきものだな」

「ロケット団のボス、カヒリさんはどこ！」

マオがカヒリはどこだとサカキに聞いた。

「彼女ならここにいるぞ」

サカキが目配せをすると近くにカヒリが倒れていた。

「カヒリさん・・・！」

「アサヤ、私達でカヒリさんを救いましょう」

スイレンがアサヤに一緒にカヒリを助けようと言った。

「あんた達、何しに来たんだい、普通に迷惑なんだけどね」

「大人には大人の考えがあるのだよ。私の世界征服の為にここを拠点にしようと思ったが、邪魔者が現れるとは・・・」

「僕達がいる限り、好きにはさせないぜ！」

「ふふ、またあの時のような状況になるとは。邪魔をするなら痛い目に合ってもらおう！」

サカキがニドクイン、ウィンディ、ゴローニャを繰り出して来た。

「ライチさん、ヒガナ、一緒に戦おう！」

「ああ、カヒリを助けてやらないとね！」

「困った大人がいるもんですね。早めに片付けるとしますか！」

ククイ博士が昼のルガルガンを、ライチが夜のルガルガンを、ヒガナがレックウザを繰り出してこれに挑んだ。

「博士、ライチさん、ヒガナさん、頑張れ！」

「マオ、応援してる暇はないです！」

スイレンが見るとしたっぱ達が群がってポケモンを出して来た。

「俺達でこいつ等を食い止めるぞ！」

「アサヤ、頑張ろう！」

「うん、行くぞ！」

アサヤはボクレーを、マオはアマージョを、カキはアローラガラガラ、スイレンはオニシズクモを出してしたっぱ達と戦った。ボクレーのはっぱカッター、アマージョのトロピカルキック、アローラガラガラのシャドーボーン、オニシズクモのねっとうがしたっぱ達のポケモンを蹴散らしていった。

# 第11話（最終回）「レインボーロケット団出現、新たな冒険の始まり」2

ウィンディがかえんほうしゃを吐いて昼のルガルガンを攻撃に出た。ルガルガンはこうそくいどうをしてこれをかわし、アクセルロックで攻撃した。

夜のルガルガンはゴローニャの飛ばすロックブラストを敢えて受けてカウンターで攻撃、レックウザはニドクインの飛ばすれいとうビームをかわしてつばめがえしで攻撃した。

「いわなだれだ！」

ククイ博士の指示で昼のルガルガンがいわなだれでウィンディを倒した。

「ストーンエッジ！」

ライチの指示で夜のルガルガンはストーンエッジでゴローニャを倒し、ヒガナのレックウザもはかいこうせんを吐いてニドクインを倒した。

「ほう、中々やる。ではこいつも同じように倒せるかな?」

サカキがボールを投げると最後の切り札であるミュウツーを繰り出して来た。

「おお、伝説ポケモンのミュウツーか、これは一筋縄ではいかないぜ・・・!」

ミュウツーの滲み出る強さに戦慄を覚えながらもククイ博士達は立ち向かった。昼のルガルガンがアクセルロックで攻撃に出た。

「サイコキネシスだ!」

サカキの指示でミュウツーはサイコキネシスを飛ばして昼のルガルガンを攻撃、サイコブレイクで沈めてしまった。

「ルガルガン！」

「まずい、頼むよ！」

ライチの指示で夜のルガルガンがストーンエッジに出たがミュウツーはこれをかわして夜のルガルガンをサイコキネシスで吹っ飛ばし、壁にぶつかった所をシャドーボールで飛ばして倒してしまった。

「何て事だ、博士とライチさんのポケモンが！」

したっぱ達と戦っていたカキが二人が敗けた事に衝撃を受けていた。

「どうしよう、このままじゃ敗けちゃう！」

「まだ分かりません。ヒガナさんがいます」

まだ戦えるのはヒガナだけだった。

「あ～らら、私だけになっちゃいましたか。でも、やれるだけやってみますよ！」

レックウザがはかいこうせんを飛ばしたが、ミュウツーは片手で受け止めて粉砕し、シャドーボールを飛ばして来た。レックウザはこれをかわしてげきりんに出たがミュウツーのサイコキネシスで吹っ飛ばされてしまう。

レックウザは青い球体を生み出してそれに入り、ミュウツーも球体を作ってぶつかり合った。シャドーボールを連射して来ると、レックウザはこれをかわしていき、ドラゴンクローを振るって攻撃に出るが、ミュウツーはこれをかわしてサイコキネシスで地面に叩き付けて、サイコブレイクで追撃した。

「やれやれ、この分じゃ私も負けちゃうかもね・・・」

「ヒガナ、こいつを使うんだ！」

ククイ博士がヒガナにＺクリスタルを渡した。

「博士、これは?」

「ドラゴンタイプの力が込められたZクリスタル、ドラゴンZだ。これで君のレックウザにZ技を使わせるんだ!」

「なるほど、やってみる価値はあるかもね。それじゃあ、博士がくれたクリスタルの力、存分に使わせてもらいますか!」

ヒガナはZ技を発動、レックウザはアルティメットドラゴンバーンを放ってミュウツーを攻撃、これが決め手となってミュウツーは力尽きた。

「ぐ、ぐぬぬ・・・」

「やりましたよ、博士」

「やったぜ!」

「わあ、ヒガナさんが勝った！」

ヒガナのレックウザが勝った事にマオ達は喜んだ。サカキの敗北にしたっぱ達は戦意を喪失した。

「さて、そちらのお嬢さんを返してもらおうかな？」

「ああ、返してやろう」

「君達、カヒリさんは大丈夫だよ」

ヒガナの言葉に安心してマオ達はカヒリに駆け寄った。

「カヒリさん、大丈夫？」

アサヤが声を掛けるとカヒリが目を覚ました。

「貴方達、あたしを・・・ありがとうございます」

カヒリは笑みを浮かべてアサヤ達に感謝した。

「仕方がない、アローラでの再度の悪だくみはこの次にしておこう。だが、私は世界征服の野望を決して諦めないぞ！」

サカキはそう言って突如出て来た稲妻の中に姿を消していった。やがて建物が揺れて来る。

「まずい、脱出だ！」

ククイ博士の指示でアサヤ達はリゾートから出た。

「あれ、元に戻ってる・・・？」

外に出るとハノハノリゾートは元の外観を取り戻していた。先程黒く染まっていたのが嘘のように元通りになっている。

「ボスがいなくなって元に戻ったんだろう」

「それにしても、あのロケット団、何だか不気味だねえ・・・」

突如現れて姿を消してしまったロケット団にライチは不安を覚えていた。

「まあでも、何度来ても私達がやっつけちゃえば問題ないよね」

「そうだね、ヒガナさんはやっぱり優しくて頼りになるね」

「あんまり期待されても困るんだけど、まあ、悪くは無いかな」

マオに評価されてヒガナは満更でも無かった。こうしてレインボーロケット団との戦いは幕を下ろしてのだった。

戦いの後、ハノハノリゾートではロケット団からリゾートを守ったアサヤ達を称えてパーティーが開かれた。マオが料理を振舞い、カキ達が舌鼓をうっている。そんな中、アサヤは外に出てヤシの木にもたれかかった。

「ふう、騒がしいと落ち着かないな・・・」

リゾート内は盛り上がっていてお祭り騒ぎのようだった。こういう雰囲気が苦手だったか一人でいたい気持ちだった。

「アサヤ・・・」

「カヒリさん!」

カヒリがやって来た事にアサヤは驚いた。憧れの人が自分の所へやって来るなんて思ってもみなかったからだ。

「リゾートではロケット団と戦っていたそうですね・・・」

「うん、カヒリさんを助けたくて・・・」

「小さいのによく頑張ってくれました。あたしはとても感謝しています。アサヤ、本当にありがとう」

　カヒリに感謝されてアサヤは嬉しそうにしていた。お礼を言われるだけでも嬉しかったが、それ以上のプレゼントを貰う事になった。

「アサヤ・・・」

　カヒリがアサヤを優しく抱き締めた。彼女の胸の感触と仄かに香る肌の匂い、温もりが感じられた。それを受けて少年の性欲に火が付いてしまう。

「きゃ！」

カヒリが驚いて下を見ると少年の性器がズボンから勃起しているのが分かった。

「アサヤ、これは・・・」

「ごめんなさい、カヒリさんのいい匂いに包まれて・・・」

「私がいけないのですね。分かりました、では、私が・・・」

「え、あ・・・！」

カヒリがアサヤのズボンを脱がして性器を晒し、手で触れて擦って来た。

「これが男の子の・・・初めて見ますけど、ピクピクしてますね・・・これを、はむ・・・」

カヒリがアサヤの性器を口に含んだ。

（確か舌を使えばいいんですよね・・・）

舌で巻き付けるようにしていき、根の部分や裏筋を舌で絡めて刺激を与えて行った。

「ああ、カヒリさんが僕のおちんちんを・・・」

憧れの、大好きだった女性が自分の性器を舐めている。それに凄く興奮して感動している自分がいた。アサヤは体を震わせてカヒリのフェラチオを受けている。

カヒリが玉袋を撫でたり触ったりしていきながら亀頭を咥えて尿道を攻めながら手で根の部分を扱いたりしていき、そして全体を舐めて行く。それを繰り返していきながら舐めていった。

「カヒリさん、ああ、いや、あん、僕もう出ちゃう、いやあ!!!」

「きゃ、いやああん!!!」

アサヤは堪え切れなくなり射精してカヒリの顔を汚していった。

「びっくりしました、それに変な匂いが・・・」

精液のかかったカヒリに興奮してアサヤはカヒリを押し倒して太腿を触っていった。

「きゃ、アサヤ、どうしました?」

「カヒリさんの足、綺麗・・・」

カヒリの太腿を両手で触って鼻で匂いを嗅ぎ、キスしたり舐めたりした。

「あたしの足が好きなのですか?」

「うん、カヒリさんの足、綺麗で柔らかくて、好き・・・」

「ふふ、変わった子、でもいいですよ・・・」

カヒリは優しく微笑んで少年の太腿へのキスや愛撫を受けていた。

「カヒリさん、僕・・・」

「いやん♡」

アサヤがカヒリのパンツを脱がして秘所に性器を押し当てて来た。腰を動かして擦っていく。

「ああん、アサヤ、あたしのおまんこに・・・あの、入れたい？」

「うん、入れたい、カヒリさんのおまんこに・・・！」

「分かりました、どうぞ、入って来て・・・」

カヒリはアサヤを抱き締めて挿入を促した。アサヤはカヒリの膣内に性器を入れていった。

「く、くううう、うううう〜〜〜ん！」

膜が破ける感触がした。カヒリは激痛に堪えてアサヤを強く抱いている。結合部からは血が流れていた。カヒリの処女を自分が奪ったのだと言う征服感が湧いて腰を動かしてカヒリを突いていった。

# 第１１話（最終回）「レインボーロケット団出現、新たな冒険の始まり」３

「ああ、ああん、うあ、あん、きゃ、おまんこの膣内で、男の子のおちんちんが暴れてます！」

カヒリは体をくねらせ腕を顔に当てて感じていた。

「カヒリさん、痛い？」

「大丈夫ですよ、これぐらいの痛み、耐えてみせますわ。だから気にせず動いて下さい・・・」

アサヤに心配を掛けまいと頬に手を添えて優しく微笑んだ。カヒリの優しい笑顔にドキドキしてアサヤは更に腰を激しく動かしていった。憧れの女性、ずっと想いを寄せていた人とこうして繋がって、エッチをしている。その感覚にアサヤは感動を覚えてい

た。

少年が夢中で腰を動かして、カヒリの腰とぶつかっていく。肌のぶつかり合う音が響いていく。

「アサヤ・・・貴方を・・・」

カヒリがアサヤを抱き締めて舌を絡める濃厚なディープキスをした。大人の女性との濃厚なキス、柔らかな舌を巻き付け合いながら胸を寄せ合う。カヒリの胸を自分の胸板に擦り合いながらカヒリの口内の舌や上顎、歯茎を舐めながら唾液を混ぜ合っていく。

「アサヤ、ああん、アサヤ、男の子のセックス、気持ちいい、ああん、ああ、きゃあ、ああ、もっと突いてえ!」

「カヒリさん!」

カヒリが頬を赤くしてもっと攻めて欲しいとお願いして来た。カヒリの膣内を何度も突いていき、カヒリの胸の乳首を吸った。

「やあん、おっぱいを吸って、可愛いですね・・・」

カヒリは優しく微笑んでアサヤの頭を優しく撫でてアサヤの乳首舐めを受け入れていた。カヒリの乳首を舌で転がして甘噛みしながら腰を動かして突いていく。

「アサヤ、もっとあたしを求めていいですよ。貴方の事、受け止めてあげます！」

カヒリはアサヤを強く抱いて少年をあやしていた。

「カヒリさん！」

「きゃ！」

体位を変えてカヒリの片足を持ち上げて横向きにさせてカヒリの膣内を突いていく。

カヒリの太腿を掴んで触ってリキスしながら秘所を何度も突いていった。

「ああ、男の子のおちんちんがあたしをずんずん突いて来る。あたし、もう、もう・・・！」

「カヒリさん！」

「アサヤ、ああん！」

再び正常位に入ってカヒリの体に抱き着いた。カヒリもアサヤを強く抱き締めて頭を抱えながら攻めを受けた。

「カヒリさん、僕、イク、イっちゃう！」

「ええ、あたしも、アサヤ、来て、来て、ああん来てえ♡」

少年もカヒリも絶頂を迎えていた。カヒリの膣内の奥へと性器を突き立てて射精し

た。

「ああ～～～ん、ああ、ああ、ああ！出てる、男の子の精液、溢れてる～～～♡」

カヒリは舌を出してアヘ顔になってアサヤの射精を受けていた。アサヤは射精を終えると息を吐いて性器を引き抜いた。

「はあ、はあ、うふふ、アサヤ・・・♡」

カヒリはアサヤに優しく微笑んでいた。

「アサヤ・・・」

倒れている木にカヒリと隣り合わせで座った。カヒリがアサヤに声を掛ける。

「カヒリさん？」

「貴方に、言いたい事があります。ごめんなさい、貴方の気持ちに気付いて上げられなくて・・・」

「それ、どうして気付いたの?」

「貴方の顔を見れば分かります。貴方は悲しげな顔をしていた。それは私に構って欲しい寂しさだったと気付いて、ごめんなさい、構ってあげられなくて」

「カヒリさん、僕、カヒリさんに甘えたかった・・・」

少年が泣き顔になるとカヒリは少年を優しく抱き締めた。

「アサヤ、これからは少しでも貴方の側にいてあげます。あたしは貴方を知りたいし、貴方もあたしを知ってくれたら・・・」

「うん、カヒリさん、僕、あのね・・・」

アサヤは思っていた事をカヒリに伝えた。

翌日・・・。

「アサヤ、しまめぐりに挑むんだね」

マオがレックウザに乗っているアサヤを見て言った。

「うん、このアローラを旅して大人になってみせるよ」

「あたしも、この子の側にいてチャンピオンになれるか見届けます」

アサヤがカヒリに言った事、それはしまめぐりをして大人になると言うものだった。

カヒリはそれに賛同してくれて、一緒に付いてくれる事になったのだ。

「アサヤ、しまめぐり、美味しい所が沢山あるから楽しんでいってね」

「しまめぐりが貴方を大きく成長させてくれます」

「アサヤ、あんたの冒険はここから始まるんだ。辛くなったら仲間を、あたし達を思い出すんだよ」

マオ、スイレン、ライチがアサヤにエールを送った。カキもガラガラ達と踊ってアサヤに旅の門出を祝福していた。

「アサヤ、君だけの度を楽しむんだぜ！」

ククイ博士もガッツポーズを送った。

「皆、行って来ます！」

「さあ、それじゃあ、最初の島、メレメレじまに行きますよ！」

ヒガナがレックウザに指示を出すと、メレメレじまへと飛んでいった。

「行っておいで・・・」

ライチ達が名残惜しそうにアサヤを見送った。

「アサヤ、あたしが貴方を見守ってあげますね」

「うん、ありがとう、カヒリさん」

カヒリがアサヤに笑顔を浮かべてキスをした。憧れの女性と旅が出来る、アサヤはその楽しみを感じていた。空をキャモメ達が飛び交っている。空は晴れ渡っている。これからのアサヤの旅に幸をもたらすような美しい旅の始まり、アサヤのしまめぐりは始まったのだった。

「転生者のアーカラじま生活」〈完〉